

成田国際物流複合基地埋蔵文化財調査報告書 1

—成田市台ノ田Ⅱ遺跡—

平成 9 年 3 月

千 葉 県 企 業 庁

財団法人 千葉県文化財センター

成田国際物流複合基地埋蔵文化財調査報告書 1

なりた だいのだ
—成田市台ノ田Ⅱ遺跡—



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、千葉県文化財センター調査報告第302集として、千葉県企業庁の成田国際物流複合基地造成事業に伴って実施した成田市台ノ田II遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この遺跡では、縄文時代早期燃糸土器が多量に見られるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成9年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村 好成

凡 例

- 1 本書は、千葉県企業庁による成田国際物流複合基地造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県成田市駒井野字台ノ田1,980ほかに所在する台ノ田II遺跡(遺跡コード211-059)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県企業庁の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理事業の組織、担当者及び実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、主任技師 蜂屋孝之が第3章3節、第6章の縄文時代の項を担当し、主任技師 矢本節朗がその他を担当した。
- 6 近世の土器、陶磁器類については、豊島区遺跡調査会 鈴木裕子氏から御教示いただいた。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県企業庁、成田市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第2図 国土地理院発行 1/25,000地形図「新東京国際空港」(NI-54-19-10-1)
 // // 「成田」 (NI-54-19-10-3)
- 9 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和46年撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査の概要	1
(1)	調査の経緯と経過	1
(2)	調査の方法	2
2	遺跡の位置と環境	3
(1)	遺跡周辺の歴史的環境	3
(2)	層序区分	6
II	旧石器時代	9
1	概要	9
2	第I文化層	9
(1)	第1ブロック	9
3	第II文化層	10
(1)	第2ブロック	10
4	単独・表採石器	13
III	縄文時代	15
1	概要	15
2	遺構	15
(1)	陥穴	15
(2)	土坑	28
(3)	遺構出土土器	28
3	包含層出土遺物	29
(1)	土器	29
(2)	石器	52
IV	古墳時代	55
1	遺構とその遺物	55
(1)	住居跡	55
2	その他の遺物	57
V	中世以降	58
1	概要	58
2	遺構とその遺物	58
(1)	土坑墓	58
(2)	掘立柱建物跡	59
(3)	土坑	60
(4)	土坑群	63
(5)	土坑列	64
(6)	溝	64
3	その他の遺物	69
(1)	土器・陶磁器	69
(2)	石器・石製品	70
(3)	銭貨	70
VI	まとめ	71
	報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	グリッド配置図	2	第27図	縄文土器 7	40
第2図	遺跡周辺の地形	4	第28図	縄文土器 8	41
第3図	遺跡の位置・周辺遺跡	5	第29図	第3類土器出土分布	43
第4図	基本層序	6	第30図	縄文土器 9	44
第5図	遺構・旧石器ブロック位置図	8	第31図	縄文土器10	45
第6図	第1ブロック器種別分布	9	第32図	縄文土器11	46
第7図	第1ブロック出土石器	10	第33図	縄文土器12	47
第8図	第2ブロック器種別分布	11	第34図	縄文土器13	47
第9図	第2ブロック出土石器	12	第35図	第5類土器出土分布	48
第10図	単独・表採石器	13	第36図	縄文土器14	49
第11図	S K001・006・007・009・014・024	17	第37図	縄文土器15	50
第12図	S K026・027・031・035・036・038・ 039・041	19	第38図	土器片円盤・土器片錘	51
第13図	S K042・044・045・046・048・049・ 050・051	21	第39図	縄文時代石器 1	53
第14図	S K052・053・054・056・058・059	23	第40図	縄文時代石器 2	54
第15図	S K062・064・067・068・084・085・ 086・087	25	第41図	S I 061	56
第16図	S K088・089・090・091・092・093・ 095・103	27	第42図	グリッド出土土器	57
第17図	S K047・057	28	第43図	S K012・013	58
第18図	遺構出土土器	29	第44図	S B073	59
第19図	第1類土器出土分布	31	第45図	S B073出土土器	60
第20図	縄文土器 1	32	第46図	S K008・010・034・084	61
第21図	縄文土器 2	33	第47図	S K037・043・063・065・069	62
第22図	第2類土器出土分布	35	第48図	S K119群	63
第23図	縄文土器 3	36	第49図	S D002・019・020・021	65
第24図	縄文土器 4	37	第50図	S D016・017・018	66
第25図	縄文土器 5	38	第51図	S D028・029・030	67
第26図	縄文土器 6	39	第52図	S D033・070・072, S A071・075	68
			第53図	近世土器・陶磁器	69
			第54図	砥石・碁石	70
			第55図	銭貨	70

表 目 次

第1表	第1ブロック石器属性表……………14	第5表	単独・表採石器属性表……………14
第2表	第1ブロック組成表……………14	第6表	土器片円盤・土器片錘計測表……………51
第3表	第2ブロック石器属性表……………14	第7表	縄文時代石器属性表……………52
第4表	第2ブロック組成表……………14	第8表	近世土器・陶磁器類器種別産地表……………72

図版目次

図版1	台ノ田II遺跡の周辺地形	図版8	縄文土器2
図版2	第1ブロック出土石器 第2ブロック出土石器 単独・表採出土石器	図版9	縄文土器3
図版3	S K001・006・007 S K009・014・024 S K026・027・031	図版10	縄文土器4
図版4	S K035・036・038 S K039・044・045 S K041・046・050	図版11	縄文土器5
図版5	S K051・052・053 S K058・067・068 S K084・085・087	図版12	縄文土器6 土器片円盤・土器片錘 縄文時代石器1
図版6	S K088・089・090 S K091・092・093 S K095・047・057	図版13	縄文土器7 土器片円盤・土器片錘 縄文時代石器1
図版7	縄文土器1	図版14	縄文時代石器2
		図版15	S I 061 S K012・013 S B073
		図版16	S K008・010・034 S D020・021・070・072、S A071・075 S D016・017
		図版17	S I 061出土遺物 カワラケ、銭貨

I はじめに

1 調査の概要

(1) 調査の経緯と経過

千葉県は、千葉県新産業三角構想のプロジェクトの一つである「成田国際空港都市構想」に基づき、平成2年12月に「成田国際物流複合基地構想及び事業化計画」を策定した。千葉県企業庁では、この基本構想を受け、国際物流機能の集積を図るため、成田空港への近接性を活かし、国際物流の効率化、地域経済の活性化等を目的として、平成3年度から、新東京国際空港の北側から東関東自動車道隣接地にいたる約78haの土地に成田物流複合基地の建設を計画した。県企業庁は、物流基地建設に当たり、千葉県教育委員会と事業地内に所在する埋蔵文化財に関して協議し、記録保存の措置を講ずることとなった。調査は財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり、県企業庁との間に平成6年2月に発掘調査委託契約が締結された。

物流基地の事業地内の台地上には全面に遺跡が確認されており、駒井野城、駒井野西ノ下遺跡、駒井野荒迫遺跡、台ノ田II遺跡の4遺跡が所在している。事業地内に所在する遺跡の調査は、事業計画との整合性を図りつつ実施することになり、平成6年2月、駒井野荒迫遺跡から調査が開始された。本遺跡の調査は平成6年11月1日から開始され、平成7年2月24日までに調査対象面積28,900㎡全域の上層確認調査を行い、その結果、調査区北側中央部に縄文早期包含層が広い範囲に分布することが明らかとなった。引き続き10,100㎡の上層本調査対象範囲の内、1,200㎡の本調査に移行し、平成7年3月30日に平成6年度の調査を終了した。

下層確認調査は、上層の調査に並行して行い、平成7年3月30日に終了した。その結果、確認グリッドの3か所から石器が確認され、調査区南端に石器集中地点が1か所分布していることが明らかとなり、312㎡を下層の本調査範囲とした。

平成7年度は、4月3日から上層本調査対象面積の残り8,900㎡及び下層本調査範囲312㎡の調査が開始され、平成7年12月26日をもって終了した。平成6・7年度の調査により本遺跡の調査対象面積の内、未調査範囲1,180㎡以外の大部分の調査範囲が終了したことになる。

調査の結果、旧石器時代の石器集中地点1か所(調査終了時の地点数)、縄文時代早期の包含層6,475㎡、陥穴38基、古墳時代の住居跡1軒、中世の掘立柱建物跡1棟、馬埋葬土坑2基、近世溝16条、土坑58基(調査終了時の遺構数及び時期)などが検出された。

翌、平成8年4月から整理作業が開始された。整理作業は、平成8年度の単年度をもって報告書刊行の運びとなった。なお、本遺跡の名称は、千葉県分布地図の名称を踏襲し台ノ田II遺跡と呼称して発掘調査、整理作業を行った。

発掘調査及び整理作業に係わる各年度の組織、担当職員及び作業内容は、下記のとおりである。

① 平成6年度

期 間：平成6年11月1日～平成7年3月30日

組 織：調査研究部長 西山太郎、成田調査事務所長 矢戸三男

担当職員：主任技師 酒井 宏

内 容：上層確認調査・本調査、下層確認調査

② 平成7年度

期 間：平成7年4月1日～平成7年12月26日

組 織：調査研究部長 西山太郎、成田調査事務所長 石田廣美

担当職員：主任技師 酒井 宏

内 容：上層本調査、下層本調査

③ 平成8年度

期 間：平成8年4月1日～平成8年9月30日

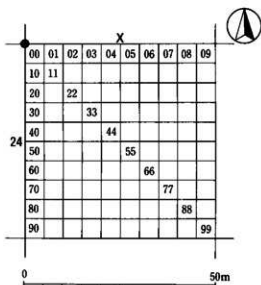
組 織：調査研究部長 西山太郎、成田調査事務所長 石田廣美

担当職員：主任技師 蜂屋孝之、矢本節朗

内 容：整理作業 水洗注記から原稿執筆、報告書刊行

(2) 調査の方法

調査区の設定 物流基地地区の調査対象範囲全域について、公共座標に合わせて東西南北に50m×50mの方眼網を設定し大グリッドとした。したがって、駒井野荒迫遺跡、駒井野西ノ下遺跡、台ノ田II遺跡の3遺跡に統一した大グリッドを設定している。大グリッドの呼称法は、北西に起点を置いて、北から南に1、2、3、……とし、西から東へA、B、C……として、これを組み合わせて使用した。大グリッド内は5m×5mに100分割の小グリッドを設定し、北西隅を起点に00、01、02……として南東隅を99とする。最小グリッドの表記はこれにより、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、例えば、24X45のようになる（第1図）。



第1図 グリッド配置図

上層確認調査 縄文時代以降の上層の調査は、調査区全域に幅2mのトレンチを南北を基本に設定して、調査対象面積の10%を実施し、遺構・遺物の分布、包含の有無を確認した。

下層確認調査 旧石器時代の下層（ローム層中）の確認調査は、調査区全域に2m×2mを調査対象面積の4%設定し、石器等の遺物が出土した地点について周囲を拡張し、遺物集中の存否と広がりを目指す方法を行った。

本調査 上層確認調査の結果に基づき、まず縄文時代以降の陥穴、竪穴住居跡、土坑などの遺構及び縄文時代の遺物包含層を対象として精査を行った。その後、下層の確認調査を行い、その結果に基づき、石器が出土した地点の周囲を拡張して石器集中地点の精査を行った。

遺構番号 調査時点においては、検出された遺構に対して精査を行った順に001号跡、002号跡……のように一連の番号を付した。本書では、調査時の遺構番号を踏襲して表記しているが、遺構番号の頭に遺構の種別を示す記号を追加した。S Iは竪穴住居跡、S Bは掘立柱建物跡、S Kは陥穴、土坑及び土坑墓、S Dは溝状遺構、S Aは土坑列を意味する。したがって、文中ではS I 061、S K 004、のように表記した。

例外は土坑列（柱穴列）及び土坑群で、土坑それぞれに遺構番号を付してあるものについて、一つのまとまりとして土坑列、土坑群ととらえ、その遺構番号の最も若い番号を代表番号としてSA075、SK119群と表記した。

2 遺跡の位置と環境

(1) 遺跡周辺の歴史的環境

台ノ田II遺跡は、千葉県成田市駒井野字台ノ田1,980ほかに所在し、千葉県北部に広がる下総台地に立地している。台ノ田II遺跡周辺の下総台地東部は北総台地と呼ばれ、ちょうど新東京国際空港地域を分水界として、北は、利根川に流入する大小の河川の開析により支谷が複雑に入り込む地形を呈し、南は、九十九里浜に注ぎ込む幾筋もの河川が北から南へ流れ、この河川から分かれる小支谷による開析で南方向に緩やかに傾斜する幅の狭い樹枝状の台地が延びている。

遺跡は根木名川の支流取香川最上流部の台地上にある。取香川は、遺跡の北西で二股に分かれ、一方は遺跡の北側から東を画し、他方は遺跡の西側を画している。調査区域はこの舌状をなす台地上のほぼ全域に当たる。遺跡周辺の台地の標高は40m前後で、低地までの比高差はおよそ20mである。

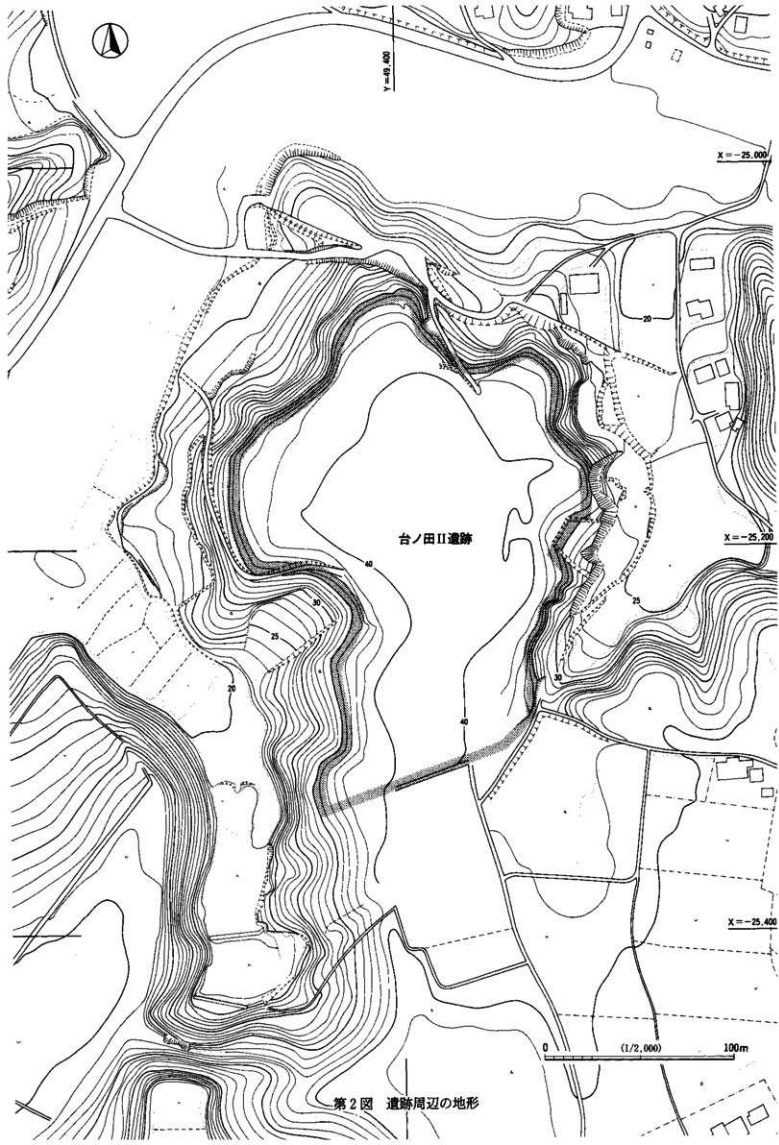
本遺跡の周辺の台地には多くの遺跡の存在が知られ、調査された遺跡も少なくない。次に、本遺跡に関係する時期を中心にこれらの遺跡を概観しておきたい。

旧石器時代の遺跡としては、西側の小支谷を挟んで駒井野荒追遺跡で珪質頁岩製の細石刃が検出されており、湧別技法による削片系細石刃石器群と考えられている¹⁾。また、新東京国際空港予定地内で大規模な調査が実施されており、後期旧石器時代の初期から終末期の細石刃石器群の時期まで豊富な資料が存在する²⁾。特に、台ノ田II遺跡と関係の深い遺跡を挙げると、天神峰奥之台遺跡（空港No65遺跡）が存在する。立川ロームIV・V層～Ⅲ層下部で黒色緻密安山岩を主体とした切出形のナイフ形石器、台形石器と角錐状石器が検出されている³⁾。木ノ根拓美遺跡（空港No6遺跡）では、V層において掘器を主体とした石器群が検出されている⁴⁾。

縄文時代の遺跡としては、旧石器時代同様に新東京国際空港予定地内で大規模な調査が行われており、台ノ田II遺跡で主体を占める早期前半の撚糸文土器群が出土する遺跡としては、取香川の最奥部の取香和田戸遺跡（空港No60遺跡）⁵⁾、木ノ根拓美遺跡（空港No6遺跡）⁶⁾や香山新田中横堀遺跡（空港No7遺跡）⁷⁾で縄文早期撚糸文土器群が大量に出土している。前期の遺跡としては山ノ谷北遺跡で関山式、黒浜式土器が出土している。中期から後期の後期遺跡としては、長田雉子ヶ原遺跡⁸⁾で中期～後期初頭の住居跡が検出され集落を構成している。細田遺跡では加曾利B式土器が出土している。

古墳時代では、数多くの遺跡と古墳群が知られている。小菅三ツ塚遺跡で前期の住居跡が検出されている。小菅法華塚I遺跡、小菅法華塚II遺跡では古墳時代後期の住居跡が検出されている。古墳群では、本遺跡の西方1kmに円墳6基が確認されている久米野古墳群が知られる。また、本遺跡西側の取香川支流を挟んで位置する駒井野西ノ下遺跡では、平成7年度の調査で前方後円墳1基、円墳2基が検出された。6世紀後半の時期と考えられている。これまで取香川上流域での古墳群の調査例はほとんどなく、古墳後期の様相を知る上で注目される調査例である⁹⁾。

奈良・平安時代の遺跡としては、取香川上流域で空港予定地内の諸遺跡を中心に製鉄遺跡が展開する。取香和田戸遺跡（空港No60遺跡）¹⁰⁾、取香御幸畑西遺跡（空港No61遺跡）等が著名である。台ノ田II遺跡で



第2図 遺跡周辺の地形

は当該期の遺構、遺物、製鉄に関連した遺物は検出されていない。

中世では、城郭遺跡として駒井野城が知られる。城の構造として郭、腰曲輪、空堀、土塁が確認され、戦国後期の時期が与えられている。周辺にある星神社という名称から、千葉氏ゆかりの武将の城の可能性が類推されている。また、「館曲輪」の地名が残っており、北関東、東北地方の城の呼称である「たて」の残存として注目されている¹¹⁾。駒井野荒迫遺跡の印旛都市文化財センター調査範囲からは屋敷跡と中世土坑群が検出されている¹²⁾。先述した駒井野西ノ下遺跡でも建物跡や土坑が大量に検出されており、馬骨埋葬土坑も数基検出されている。

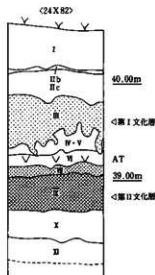
近世では、空港周辺地域で「佐倉七牧」の1つである取香牧が展開しており、野馬土手が各所に存在している。

(2) 層序区分

本遺跡は、前項で説明したように取香川上流域の台地に位置している。この台地上は地形面では下末古面(S面)に比定されている。これまでの下総台地における立川ローム層中の調査の層序区分を踏まえて、基本的には発掘調査での観察を中心に層序区分を行った結果を示した。

基本層序

- I 層：褐色土。表土及び耕作土。削平され天地返しを受けたようにローム小ブロックが混入する。
- II b 層：赤褐色土。色調は赤色、黄褐色スコリアを含み、全体として赤味を帯びている。遺跡全域で薄くとぎれとぎれに確認される。いわゆる「新期テフラ層と思われる層」である。なお、II a 層は確認されなかった。
- II c 層：黒褐色土。遺跡中央部で縄文早期前半の撚糸文系土器群を包含する層となっていた。
- III 層：黄褐色ローム土。いわゆるソフトローム層と呼ばれる層である。オレンジスコリアを微量含む。本遺跡ではIV層以下との境界をなす波状帯の下端はIV・V層を切ってVI層に及んでるのが一般的である。層厚は40cm前後である。本遺跡の第II文化層はこの層の下部に遺物の垂直分布の集中が見られた。
- IV・V層：黄褐色ローム土。III層が厚くソフト化しており、IV層とV層は識別されなかった。赤色、黒色、オレンジ、白色スコリアを少量含む。層厚は15cm前後である。
- VI 層：明黄褐色ローム土。始良Tn火山灰層(AT層)である。白色バミスを多量に含む。ATが濃密に分布している範囲をVI層とした。層厚は約15cmである。
- VII 層：暗黄褐色ローム土。第二黒色帯上部に相当する層である。VI層よりやや暗色である。赤色、白色、黒色スコリアを少量含む。ATはこの層まで拡散している。層厚は約15cmである。空港周辺の遺跡と比較するとややVII層を薄くしている。
- IX 層：暗黄褐色ローム土。第二黒色帯下部に相当する層である。ややVII層より暗色化している。下部で粘性が強まる。土質的には分層は困難であったが、ATの拡散が見られ



第4図 基本層序 (S: 1/20)

なくなる部分から下位をIX層としている。層厚は40cm前後である。

- X 層：明褐色ローム土。立川ローム層最下層に相当する。IX層より明るくなる。下部がやや軟質化し、粘性を帯びる。層厚は約30cmである。
- X I 層：褐色ローム土。武蔵野ローム層最上層に相当する。上位層より粘性が強くなり、乾燥すると上部でクラックが発達する。

注1 林田利之 1992 『駒井野荒遺跡』(財)印旛郡市文化財センター

2 小久貫 隆・新田浩三 1994 『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－取香和田戸遺跡(空港No.60遺跡)－』(財)千葉県文化財センター

3 横山 仁・矢本節朗 1997 『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅹ－天神峰奥之台遺跡(空港No.65遺跡)－』(財)千葉県文化財センター

4 千葉県文化財センター 1984 『房総考古学ライブラリー 1先土器時代』

5 注2に同じ。

6 新田浩三 1993 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－木ノ根拓美遺跡(空港No.6遺跡)－』(財)千葉県文化財センター

7 西川博孝ほか 1984 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－No.7遺跡－』(財)千葉県文化財センター

8 喜多圭介 1989 『長田雉子ヶ原遺跡・長田香花田遺跡』(財)印旛郡市文化財センター

9 千葉県文化財センター 1996 『千葉県文化財センター年報 平成7年度』

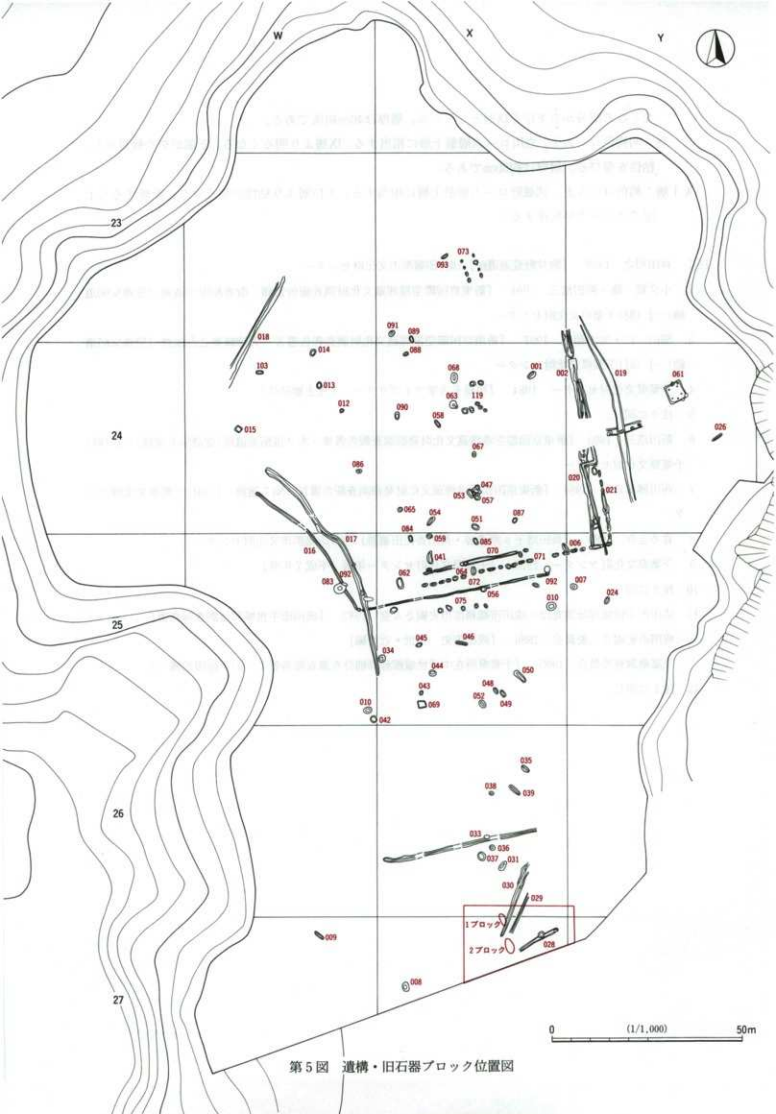
10 注2に同じ。

11 成田市中世城郭址調査団・成田市総務部市史編さん室 1983 『成田市中世城郭址調査報告書』

成田市史編さん委員会 1986 『成田市史 中世・近世編』

千葉県教育委員会 1995 『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ－旧下総国地域－』

12 注1に同じ。



第5図 遺構・旧石器ブロック位置図

II 旧石器時代

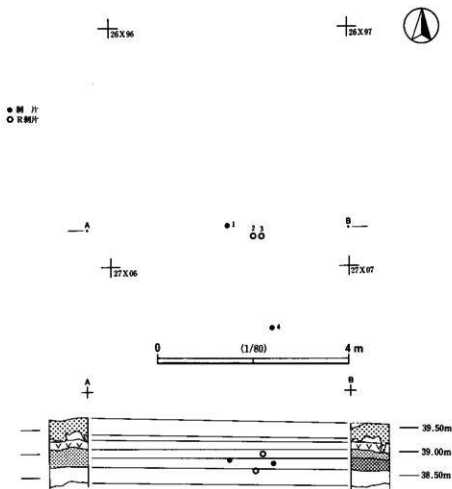
1 概要

台ノ田遺跡では、調査区南端で2か所のブロックが検出された。同一地区に分布するが、明確に出土層位が異なる。それぞれ単独のブロックであるが、便宜的に2つの文化層を設定した。第I文化層は立川ローム層のIX層（第2黒色帯下部）に産出層位があるもので、第1ブロックが帰属する。第II文化層は立川ローム層のIV・V層～III層下部に産出層位があるもので、第2ブロックが帰属する。第I文化層は小規模なブロックであり、特徴的な器種は検出されていない。第II文化層ではナイフ形石器が検出されている。

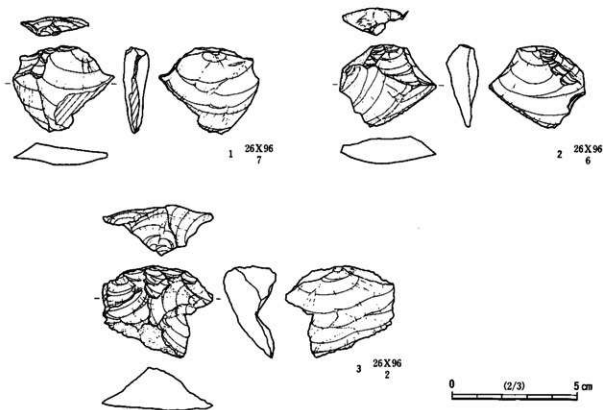
2 第I文化層

(1) 第1ブロック（第6・7図、表1・2、図版2）

分布状況 調査区南端で調査されたブロックである。26X南東端、27X区北西端に位置しており、調査区の北方向に広がる舌状台地付け根の東側縁辺部に当たる。現況では、立川ローム層の堆積は東側に緩やかに傾斜する。



第6図 第1ブロック器種別分布



第7図 第1ブロック出土石器

遺物総数は4点で、小規模のブロックとなっている。その分布はコンパクトにまとまり、北側に3点が集中し、約2.0mの間隔をおいて南側に1点が発見されている。26X96区から27X06区にかけて分布する。分布範囲は南北2.2m、東西1.0mを測る。垂直分布では約0.4mの高低差がある。土層断面の投影ではX層上面からVII層にかけて分布し、IX層に産出層位が求められる。

母岩別資料 2母岩が認められる。瑪瑙1母岩3点、安山岩1母岩1点である。瑪瑙1の母岩以外はブロック内で単独母岩となっている。瑪瑙1はブロック全体に分布している。安山岩1はブロック中央のR剥片の素材となっている。

出土遺物 少数で構成されるブロックであり特徴的な利器は出土していないが、二次加工のある剥片(以下、R剥片と略記する。)が2点出土している。

R剥片 1・2はR剥片である。1は横長剥片の背面右側縁上半に細かな調整加工が認められる。下半は新しい欠損である。2もやや厚手の横長剥片の裏面左側縁下半に幅広い調整加工が看取される。

剥片 3は剥片である。瑪瑙1を母岩とする。複剥離打面の頭部調整が顕著な横長剥片であり、背面下端に自然面が残存する。

3 第II文化層

(1) 第2ブロック (第8・9図、表3・4、図版2)

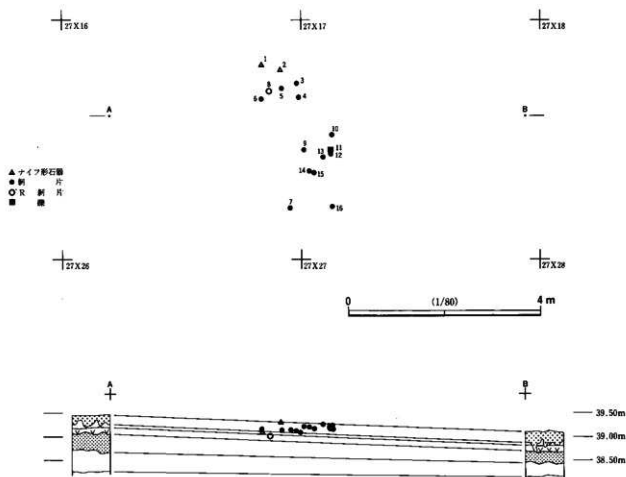
分布状況 調査区南端で調査されたブロックである。27X区北西端に位置しており、調査区の南方向に広がる舌状台地付け根の東側縁辺部に当たる。現況では、立川ルーム層の堆積は東側に緩やかに傾斜する。

遺物総数は17点であり、小規模なブロックである。その分布は比較的まとまっている。ブロックの中央部に空白部があり、北側と南側の2か所に密集して分布する状況である。27X16区から27X17区にかけて南北方向に長い楕円形状に分布する。分布範囲は南北3.0m、東西1.6mを測る。垂直分布ではおよそ0.3mの高低差があり、土層断面への投影では、VI層上部からIII層下部にかけて分布し、IV・V層上面～III層下部に産出層位を求めることができる。

母岩別資料 3母岩が認められ、内訳は安山岩2母岩16点、チャート1母岩1点である。点数の多い母岩を挙げると、安山岩2が13点であり、母岩構成の主体を占める。この母岩がブロック分布の中心をなしている。母岩と器種の関係では、ナイフ形石器2点のうち1点は安山岩3の母岩を素材としている。

出土遺物 小規模なブロックであるが、主要な器種ではナイフ形石器が2点検出されている。他はほとんどが剥片であり、比較的単純な器種構成となっている。

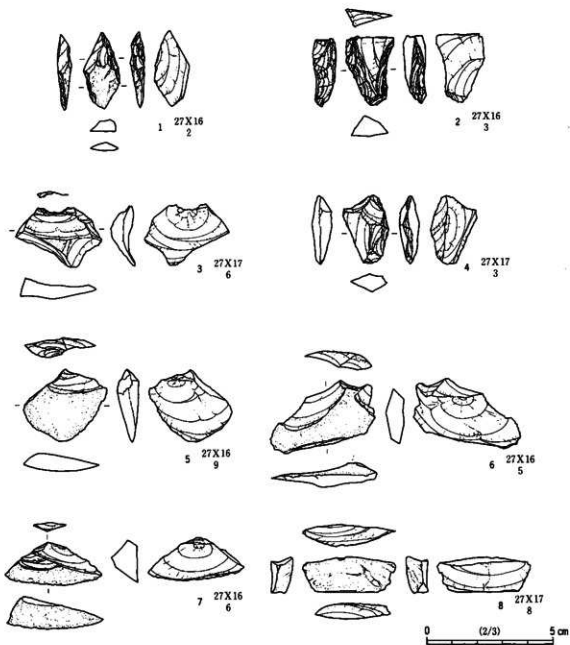
ナイフ形石器 1～2はナイフ形石器である。1は横長剥片を斜位に用いて、素材の打面部を先端側に設定している。打面部と対向する末端辺を細部加工して、平面形状を平行四辺形状に整形する。2は横長



第8図 第2ブロック器種別分布

剥片を斜位に用いて、素材の打面部を基部側に設定している。素材の打面部と対向する一側縁を連続的に刃潰し加工し、基部を尖らせている。先端部が欠損しているため本来の形状は明確でないが、切出タイプのナイフ形石器となると思われる。

剥片 3～8は剥片であり、すべて横長剥片である。3は安山岩3を母岩とし、それ以外は安山岩2を母岩とする。3は線状に近い打面となる。4は頭部調整が顕著である。5～8はそれぞれ自然面を残置するものである。いずれも比較的幅広の横長剥片である。8は打面部と末端部が折断したように平行に割れている。

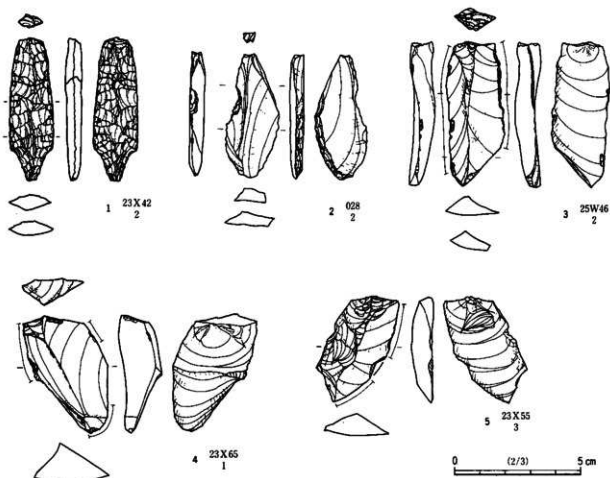


第9図 第2ブロック出土石器

4 単独・表採石器（第10図、表5、図版2）

旧石器時代の確認調査あるいは縄文時代以降の調査に伴って検出され、石器集中の広がりがなく単独で検出された石器をここで一括する。有基尖頭器が出土しているが、縄文時代の項で扱わず便宜的にこの項で扱う。

出土遺物 1は有基尖頭器である。細身の最大幅が基部寄りになる形状を呈する。基部は挟り込みが明瞭になりV字状に突出し、端部に平坦な面が残存する。2はナイフ形石器である。横長剥片を横位に用いている。打面部を折断し、素材の打面部側の側縁を連続的に調整加工している。形状はやや幅広いナイフ形石器である。3は石刃である。打面調整が顕著で、両側縁がほぼ平行して末端部が尖る形状を呈している。両側縁には微細な剝離痕が連続する。3～5はそれぞれ良質な珪質頁岩を石材としている。4・5は使用痕のある剥片（表ではU剥片と略記する。）である。4は平坦な打面を持ち厚味のある縦長剥片で、腹面と背面の剝離方向が直交する。両側縁及び端部に集中的に微細剝離痕が観察される。5は点状打面となり、背面右側縁の鋭利な縁辺に微細剝離痕が連続する。



第10図 単独・表採石器

第1表 第1ブロック石器属性表

番号	遺物番号	器 種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重 量 g	押印 番号	打面 形状	打面 調整	調整 調整	背 面 I	背 面 II	背 面 III	背 面 IV	背 面 C	打角 °	先端 形状	折面 部位	母 岩
1	26X960002	割 片	37.1	43.4	19.5	20.1	3	3			2	1				96	F		メノウ 1
2	26X960006	R 割 片	32.7	38.3	12.5	10.8	2	C			2	2				103	F		メノウ 1
3	26X960007	R 割 片	34.8	39.8	9.7	10.3	1	2	○		2	2				96	S	安山岩	メノウ 1
4	27X060011	割 片	24.6	23.8	11.1	5.2		P			2	1					F		メノウ 1

第2表 第1ブロック組成表

	R割片	割片	計	数量比%
安山岩	1	1	1	25.5
メノウ	1	1	2	75.5
計	2	2	4	100.5
組成比%	50.0	50.0	100.00	

第3表 第2ブロック石器属性表

番号	遺物番号	器 種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重 量 g	押印 番号	打面 形状	打面 調整	調整 調整	背 面 I	背 面 II	背 面 III	背 面 IV	背 面 C	打角 °	先端 形状	折面 部位	母 岩	
1	27X160002	ナイフ形石器	29.8	14.7	5.2	1.7	1												安山岩 2	
2	27X160003	ナイフ形石器	26.5	18.9	18.6	4.2	2												安山岩 3	
3	27X160004	割 片	20.3	29.7	8.8	5.4		-	-	-								M	安山岩 2	
4	27X160005	割 片	27.6	44.5	6.6	6.8	6	H			2	1				130	F		安山岩 2	
5	27X160006	割 片	16.8	38.2	10.0	5.2	7	H			3					120	F		安山岩 2	
6	27X160007	割 片	13.8	21.1	7.3	2.1	8	-	-	-							○	M	安山岩 2	
7	27X160008	割 片	18.5	21.6	5.1	2.0		H									○	F	安山岩 2	
8	27X160009	割 片	28.4	34.0	7.6	5.6	5	H			2						○	L, H, B	安山岩 2	
9	27X170002	割 片	4.7	27.4	2.7	0.5		-	-	-								○	F	安山岩 2
10	27X170003	割 片	17.6	26.5	8.6	2.9	4	2	T		2	1				121	F		安山岩 2	
11	27X170004	割 片	23.9	22.9	9.8	8.4													チャート 1	
12	27X170005	割 片	13.5	16.8	4.2	0.8		H			1	1						F	安山岩 2	
13	27X170006	割 片	23.3	33.7	6.5	4.5	3	H		PL	3	2				100	F		安山岩 3	
14	27X170007	割 片	20.7	26.7	8.8	3.9		H			2		1				○	F	安山岩 2	
15	27X170008	割 片	17.2	36.9	8.2	5.1		-	-	-								○	H, B	安山岩 2
16	27X170009	割 片	17.7	23.8	7.5	3.0		H		T	2	2						○	安山岩 2	

第4表 第2ブロック組成表

	ナイフ形石器	割片	計	数量比%
安山岩	2	12	13	81.25
安山岩	3	1	2	12.5
	2	13	15	93.75
チャート	1		1	6.25
計	2	13	16	100.00
組成比%	12.5	81.25	6.25	100.00

第5表 単独・表採石器属性表

番号	遺物番号	器 種	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重 量 g	押印 番号	打面 形状	打面 調整	調整 調整	背 面 I	背 面 II	背 面 III	背 面 IV	背 面 C	打角 °	先端 形状	折面 部位	母 岩
1	23X42-2	有茎尖頭器	17.5	41.2	6.4	6.8	1												安山岩 4
2	23X55-3	石 刃	32.8	41.4	8.8	10.0	3	P			3	2					-	H, B	瑠璃黄頁岩 1
3	23X65-1	割 片	33.3	45.8	16.6	15.6	4	H									H		瑠璃黄頁岩 2
4	25W46-2	割 片	23.0	56.6	9.8	7.7	5	3	○		2		1	1		93	F		瑠璃黄頁岩 3
5	SD028-2	ナイフ形石器	48.9	20.7	5.2	5.8	2												

III 縄文時代

1 概要

本遺跡で縄文時代の所産とした遺構は、陥穴44基、土坑2基である。数多くの陥穴が検出されている。それらは調査区中央部北側を中心に全域に分布している。縄文時代の土器は量的に多くまとまって出土しており、調査区の中央部北側で包含層の本調査6,475㎡が実施された。縄文土器は早期前半の燃糸文土器群を主体としている。石器は量的には多くはないが、土器分布範囲に一致するように出土しており当該期の可能性が高い。

2 遺構

(1) 陥穴

陥穴は豊富な形態が見られる。開口部と構底部の形状により、本遺跡の陥穴の形態は次の4つの類に分類される。

第Ⅰ類 開口部が長楕円形状の形状を呈し、坑底が細長く狭くなるもの。

第Ⅱ類 開口部が長楕円形状の形状を呈し、坑底が隅丸長方形、長方形になるもの。

第Ⅲ類 開口部が隅丸長方形、長方形を呈し、坑底も隅丸長方形、長方形になるもの。

第Ⅳ類 開口部、坑底とも円形状になるもの。

さらに、第Ⅰ類～第Ⅳ類は底面のピットの有無により、それぞれ細分される。

SK001 (第11図、図版3)

調査区北東側、24X17区に位置する。平面形は長楕円形を呈する。規模は長軸約2.4m、短軸1.2m、深さ1.4mを測る。坑底は幅狭くほぼ平坦であるが、北東壁部分がピット状に深くなる。また、径約20cm、深さ30cmの小ピットが1つ北寄りに存在する。長軸方位は、N-30°-Eを示す。壁は、長軸方向、短軸方向とも垂直に立ち上がり、開口部でやや広がる。覆土は、上層が黒褐色土を主体にし、中層から下層部ではローム主体の黄褐色土となり、最下層が締まりの弱い黒褐色土となる。自然堆積を示している。遺物は出土しなかった。

SK006 (第11図、図版3)

調査区中央部、25X09・25Y00区に位置する。平面形は細長い楕円形を呈する。規模は長軸約3.4m、短軸1.2m、深さ1.6mを測る。坑底は幅が狭く、ほぼ平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-24°-Wを示す。壁は急角度に立ち上がり開口部でやや広がる。西側壁に段をもつ。覆土は、上層が暗褐色土・黒褐色土を主体にし、中層から下層部ではローム主体の黄褐色土となり、最下層が暗褐色土となる。自然堆積を示している。遺物は出土しなかった。

SK007 (第11図、図版3)

調査区東側、25Y20区に位置する。平面形は不整形を呈する。規模は長軸約1.7m、短軸1.5m、深さ0.9mを測る。坑底は径0.7mの円形を呈し、平坦である。中央に径約30cm、深さ30cmのピットが1つ確認された。長軸方位は、N-60°-Wを示す。壁は急角度に立ち上がり、開口部はやや広がる。覆土は、上層

が暗褐色土で、中層から下層部ではローム主体の黄褐色土となり、自然堆積を示している。遺物は縄文土器が少量出土した。

SK009 (第11図、図版3)

調査区南西端、27W16・17区に位置する。平面形は細長い楕円形を呈する。規模は長軸約3.0m、短軸0.6m、深さ0.6m～0.8mを測る。坑底は幅が狭く、長軸の北西壁に向かって緩やかに低くなる。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-55°-Wを示す。壁は垂直に近く立ち上がる。覆土は、上層から下層までローム主体の黄褐色土で、最下層は暗褐色土となっており、自然堆積を示している。遺物は出土しなかった。

SK014 (第11図、図版3)

調査区北西側、24W06区に位置する。平面形は不整形楕円形を呈する。規模は長軸約1.8m、短軸1.4m、深さ0.9mを測る。坑底は楕円形を呈し、平坦である。中央に長軸約60cm、短軸約30cm、深さ50cmのやや大きなピットが1つ確認された。長軸方位は、N-45°-Eを示す。壁は垂直に近く立ち上がるが、一部に段をもつ。覆土は、上層から下層にかけて暗褐色土とローム主体の黄褐色土が交互に堆積し、最下層は暗褐色土となり、自然堆積を示している。遺物は縄文土器の小破片が少量出土した。

SK024 (第11図、図版3)

調査区北西側、25Y31・32区に位置する。平面形は長い楕円形を呈する。上部は浅い落ち込みにより削平されている。規模は長軸約2.0m、短軸0.9m、深さ1.7mを測る。坑底は幅が狭く、長軸の南西壁寄りが深くなる。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-20°-Eを示す。壁は下半部で垂直に立ち上がり、上半部はやや広がる。短軸両側の中位が段状をなす。遺物は出土しなかった。

SK026 (第12図、図版3)

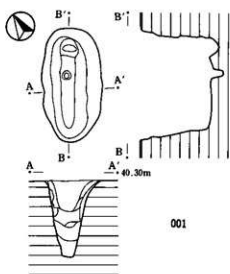
調査区北西側、24Y46・47・57区に位置する。平面形は細長い楕円形を呈する。規模は長軸約3.0m、短軸0.4m、深さ0.6mを測る。坑底は狭く凹凸を持ちながら長軸の北東壁方向に深くなる。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-58°-Eを示す。壁は長軸方向は緩やかに立ち上がるが、短軸方向は垂直に立ち上がる。覆土は、上層に暗褐色土が堆積し、下層でローム主体の黄褐色土となる。遺物は出土しなかった。

SK027 (第12図、図版3)

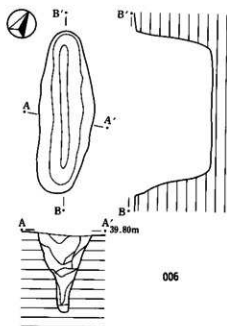
調査区南端、27X19区に位置する。南東半分の上部はSD028により削平されている。平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約1.5m、短軸1.3m、深さ0.7mを測る。坑底は不整形円形を呈し、平坦である。中央に径約20cm、深さ30cmの小ピットが1つ確認されている。長軸方位は、N-62°-Eを示す。壁は、開口部に向かって広がりながら急角度に立ち上がる。覆土は上層から下層まで暗褐色土を主体とする土層である。遺物は出土しなかった。

SK031 (第12図、図版3)

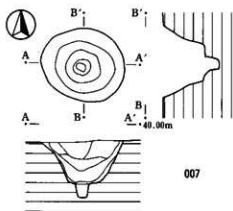
調査区南側、26X76区に位置する。平面形は長楕円形を呈する。規模は長軸約2.6m、短軸1.6m、深さ2.3mを測る。坑底は南西側が膨らむ楕円形を呈し、中央がやや浅く両壁寄りで深くなる。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-50°-Eを示す。壁は、開口部に向かってわずかに広がりながら急角度に立ち上がる。覆土は上層が黒褐色土、暗褐色土を主体とし、中層がローム主体の黄褐色土となり、最下層が暗褐色土となる。遺物は出土しなかった。



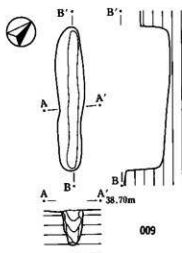
001



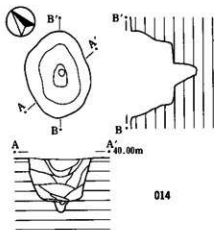
006



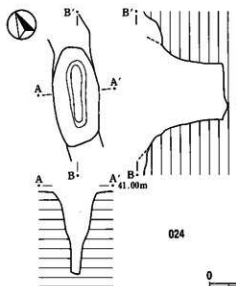
007



009



014



024

0 (1/80) 2 m

第11圖 S K001 · 006 · 007 · 009 · 014 · 024

SK035 (第12図、図版4)

調査区南側、26X17・27区に位置する。平面形は、北西側で浅く開口部が攪乱されるが、長楕円形を呈するものと推定される。規模は長軸約2.6m、短軸1.0m、深さ1.0mを測る。坑底は細長い楕円形を呈し、平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-48°-Wを示す。壁は、長軸北西壁で下半部がオーバーハングし、段が突出している。覆土は上層から下層までロームを主体とする黄褐色土となる。遺物は出土しなかった。

SK036 (第12図、図版4)

調査区南側、26X65・66区に位置する。平面形は、南東側で膨らむ楕円形を呈する。規模は長軸約1.5m、短軸1.2m、深さ0.8mを測る。坑底は隅丸長方形を呈し、やや凹凸が認められる。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-60°-Wを示す。壁は開口部に向かって広がりながら立ち上がるが、短軸南東壁では中位に段を持つ。覆土は上層から下層まで黒褐色土、暗褐色土を主体とするが、壁寄りではロームを主体とする黄褐色土の堆積が確認された。遺物は出土しなかった。

SK038 (第12図、図版4)

調査区南側、26X35・36区に位置する。平面形は、南西側が深く攪乱されるが、隅丸長方形を呈すると思われる。規模は長軸約1.1m、短軸0.9m、深さ0.7mを測る。坑底はほぼ隅丸長方形を呈する。中央やや南西寄りで径約20cm、深さ40cmの小ピットが1つ確認された。長軸方位は、N-80°-Eを示す。覆土は上層が黒褐色土で、中層から下層がロームを主体とする黄褐色土となる。遺物は出土しなかった。

SK039 (第12図、図版4)

調査区南側、26X36区に位置する。SK038の北東側に近接する。平面形は、細長い楕円形を呈する。規模は長軸約3.5m、短軸0.9m、深さ1.0mを測る。坑底は幅狭く、中央部がやや深くなる。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-48°-Wを示す。壁は下半部が垂直に近く立ち上がり、そこから開口部に向かって広がるが、長軸北西壁で坑底近くがオーバーハングしている。覆土は上層が暗褐色土で、中層から下層がロームを主体とする黄褐色土となり、最下層に暗褐色土が堆積する。遺物は出土しなかった。

SK041 (第12図、図版4)

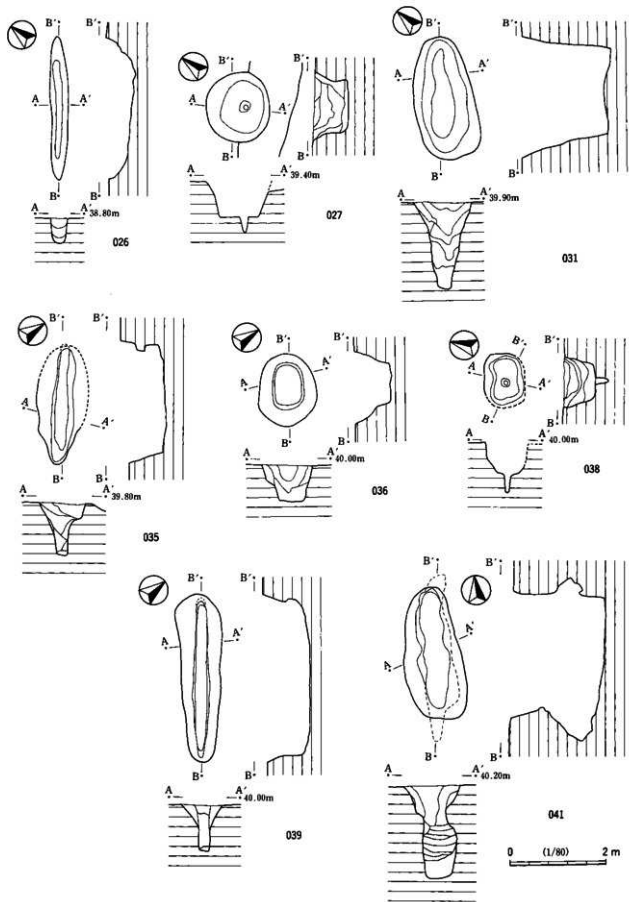
調査区中央、25X11区に位置する。平面形は、南側が膨らむ長楕円形を呈する。規模は長軸約3.5m、短軸1.2m、深さ1.9mを測る。坑底は不整形な楕円形を呈する。長軸南側がやや浅い。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-8°-Wを示す。壁は、長軸北壁の中段に挟り込みが見られ、南壁で下半部が大きくオーバーハングしている。短軸断面は徳利状をなす。覆土は上層が暗褐色土で、壁寄りにローム主体の黄褐色土が見られる。中層から下層がロームを主体とする黄褐色土となる。遺物は出土しなかった。

SK042 (第13図)

調査区中央、25W99区、25X90区に位置する。平面形は不整形な円形を呈する。規模は径約1.8mから1.7m、深さ0.9mを測る。坑底は平面形が不整形な円形を呈し、さらに一段円形に掘り込まれている。中央部に径10cm、深さ5cmほどの小ピットが1つ確認された。覆土は上層が黒褐色土及び暗褐色土で、中層から下層がローム主体の黄褐色土と暗褐色土の層が交互に堆積する。遺物は出土しなかった。

SK044 (第13図、図版4)

調査区中央、25X72・73区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.8m、短軸1.5m、深さ1.2mを測る。坑底は隅丸長方形を呈する。中央部から西側で径20cm、深さ20cm～10cmほどの小ピットが



第12圖 S K 026・027・031・035・036・038・039・041

3つ確認された。長軸方位は、N-90°-Wを示す。壁は開口部に向かってやや広がりながら急角度に立ち上がるが、南東壁中位に段がある。覆土は上層から中層が黒褐色土及び暗褐色土で、中層から下層がローム主体の黄褐色土と暗褐色土の層が交互に堆積する。遺物は出土しなかった。

SK045 (第13図、図版4)

調査区中央、25X52区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸約1.6m、短軸0.9m、深さ1.2mを測る。坑底は隅丸長方形に近い長楕円形を呈する。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-78°-Eを示す。壁は急角度に立ち上がるが、長軸東壁で坑底付近が抉れている。覆土は上層から中層が明褐色土及び黒褐色土で、下層がローム主体の黄褐色土となる。遺物は出土しなかった。

SK046 (第13図、図版4)

調査区中央、25X54区に位置する。平面形は細長い楕円形を呈する。規模は長軸約3.3m、短軸0.8m、深さ1.1mを測る。坑底は幅狭い。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-73°-Wを示す。壁は長軸両壁で坑底付近が抉れている。覆土は上層から下層にかけて暗褐色土、黒褐色土が堆積し、最下層がローム主体の黄褐色土となる。遺物は出土しなかった。

SK048 (第13図)

調査区南側、25X86区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.8m、短軸0.9m、深さ0.8mを測る。坑底は狭い長方形を呈しほぼ平坦であるが、南東壁寄りで深くなる。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-33°-Wを示す。覆土は、上層から下層まで暗褐色土及び黒褐色土であるが、壁寄りにローム主体の黄褐色土が堆積する。遺物は出土しなかった。

SK049 (第13図)

調査区南側、25X86区に位置する。SK048の南東側に近接する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸約2.0m、短軸1.0m、深さ0.8mを測る。坑底は長方形を呈しほぼ平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-35°-Wを示す。覆土は上層が暗褐色土及び黒褐色土で、下層がローム主体の黄褐色土となる。遺物は出土しなかった。

SK050 (第13図、図版4)

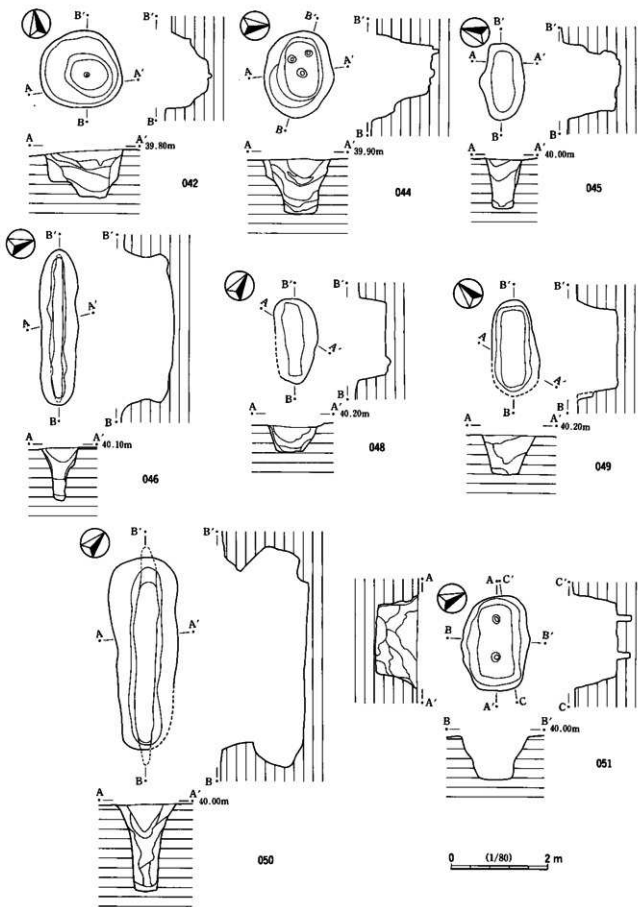
調査区中央やや南側、25X57区に位置する。平面形は細長い楕円形を呈する。規模は長軸約4.0m、短軸1.4m、深さ1.8mを測る。坑底は幅狭い長楕円形を呈し、平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-35°-Wを示す。壁は長軸の両壁で大きくオーバーハングしている。覆土は上層が黒褐色土及び暗褐色土で、中層から下層がローム主体の黄褐色土と黒褐色土の交互層となり、最下層が黒色土となる。遺物は出土しなかった。

SK051 (第13図、図版5)

調査区中央、25X06区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸約2.0m、短軸1.4m、深さ0.9mを測る。坑底は隅丸長方形を呈し、平坦である。長軸ラインに並んで西側に径15cm、深さ30cm、東側に径20cm、深さ30cmほどの小ピットが2つ確認された。長軸方位は、N-64°-Wを示す。覆土は、上層から中層が黒褐色土及び暗褐色土で、下層がローム主体の黄褐色土となる。遺物は覆土中層から縄文土器が少量出土した。

SK052 (第14図、図版5)

調査区中央、25X85・95区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約2.2m、短軸1.6m、深



第13圖 SK042 · 044 · 045 · 046 · 048 · 049 · 050 · 051

さ2.9mを測る。坑底は細長い楕円形を呈し、平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-34°-Wを示す。壁は、下半部が垂直に近く立ち上がり、開口部に向かってやや広がる。覆土は上層が黒褐色土及び暗褐色土で、中層にローム主体の黄褐色土が入り、下層が暗褐色土となる。遺物は出土しなかった。

SK053 (第14図)

調査区中央、24X75・85区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約2.4m、短軸1.3m、深さ1.2mを測る。坑底は隅丸方形を呈し、北側に段を2段もって、南側が低くなる。中央部に径15cm、深さ20cmの小ピットが1つ確認されている。長軸方位は、N-33°-Wを示す。覆土は上層が黒褐色土及び暗褐色土で、中層にローム主体の黄褐色土が入り、下層が暗褐色土となる。遺物は出土しなかった。

SK054 (第14図)

調査区中央、24X92・93区に位置する。平面形は細長い楕円形を呈する。規模は長軸約2.6m、短軸0.9m、深さ1.5mを測る。坑底は幅が狭く、ほぼ平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-30°-Eを示す。壁は長軸壁で丸くオーバーハングし、袋状になる。覆土は上層が暗褐色土で、中層から下層がローム主体の黄褐色土となる。遺物は縄文土器が少量出土した。

SK056 (第14図、図版5)

調査区中央やや南側、25X25・35区に位置する。平面形は角の張る円形を呈する。規模は径約2.6m、深さ0.7mを測る。坑底は不整形で平坦である。中央部に細長い楕円形のピットがあり、さらに中に2つのピットが2つ確認された。ピットの規模は長軸約50cm、深さは大きい方が40cm、小さい方が20cmである。長軸方位は、N-30°-Eを示す。壁は急角度に立ち上がる。覆土は上層が暗褐色土で、中層から下層がローム主体の黄褐色土となる。遺物は出土しなかった。

SK058 (第14図、図版5)

調査区中央、24X24区に位置する。平面形は細長い楕円形を呈する。規模は長軸約2.4m、短軸1.0m、深さ2.0mを測る。坑底は幅の狭い楕円形状を呈し、ほぼ平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-35°-Wを示す。壁は、長軸北西壁で軽くオーバーハングする。覆土は上層が暗褐色土で、中層から下層がローム主体の黄褐色土となる。遺物は出土しなかった。

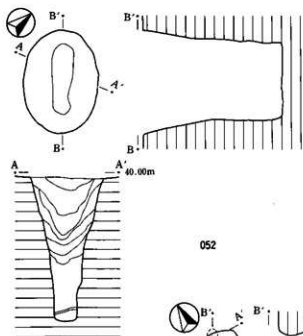
SK059 (第14図)

調査区中央、25X02区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.8m、短軸1.2m、深さ0.8mを測る。坑底は細長い隅丸長方形を呈し、平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-62°-Wを示す。覆土は、上層から下層まで暗褐色土を基調とし、壁寄りでローム主体の黄褐色土が堆積する。遺物は出土しなかった。

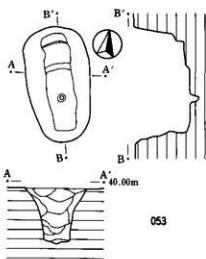
SK062 (第15図)

調査区中央、25X21区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸約2.7m、短軸1.5m、深さ2.1mを測る。坑底は隅丸長方形を呈し、中央部がやや低くなる。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-15°-Wを示す。壁は、長軸北西壁の中間が小さく挟れる。覆土は上層から下層まで暗褐色土とローム主体の黄褐色土の交互層で、最下層はローム主体の黄褐色土となる。また、最下層の上位層には焼土と炭化物の混成層が堆積する。遺物は縄文土器が少量出土した。

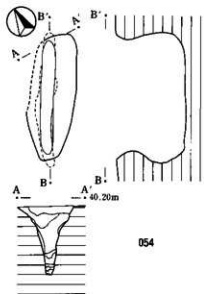
SK064 (第15図)



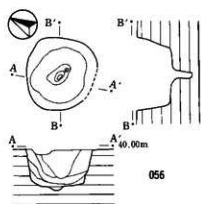
052



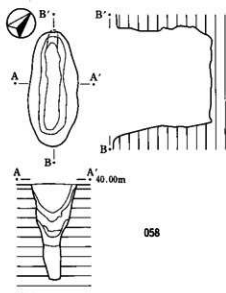
053



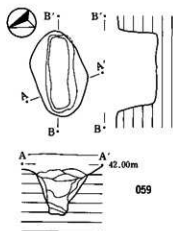
054



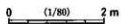
056



058



059



第14图 S K 052 · 053 · 054 · 056 · 058 · 059

調査区中央、25X16・26区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸約1.8m、短軸1.2m、深さ1.1mを測る。坑底はやや曲がった隅丸長方形を呈し、平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-10°-Eを示す。遺物は出土していない。

SK067 (第15図、図版5)

調査区中央やや北側、24X55・65区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.5m、短軸1.1m、深さ0.6mを測る。坑底は楕円形を呈し、平坦である。坑底には径50cm、深さ15cmの浅いピットが1つ確認された。長軸方位は、N-20°-Eを示す。覆土は暗褐色土が主体であり、壁際にローム主体の黄褐色土が堆積する。遺物は出土していない。

SK068 (第15図、図版5)

調査区中央、24X13・14・23・24区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約2.6m、短軸1.8m、深さ1.7mを測る。坑底は長楕円形で、長軸南寄りやや深くなる。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-2°-Eを示す。覆土は上層が黒色土で、中層がローム主体の黄褐色土となり、下層は暗褐色土が主体である。遺物は縄文土器が少量出土している。

SK084 (第15図、図版5)

調査区中央、25X01区に位置する。平面形は隅丸長方形に近い楕円形を呈する。規模は長軸約1.6m、短軸1.1m、深さ0.8mを測る。坑底は隅丸長方形を呈し、平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-20°-Wを示す。覆土は上層は暗褐色土が主体となる。遺物は縄文土器が少量出土している。

SK085 (第15図、図版5)

調査区中央、25X05区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸約1.8m、短軸1.0m、深さ0.8mを測る。坑底は北側が尖った隅丸長方形を呈し、平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-24°-Wを示す。覆土は上層が暗褐色土で、下層はローム主体の黄褐色土となる。遺物は出土しなかった。

SK086 (第15図)

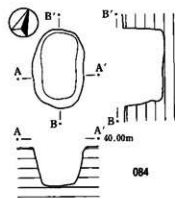
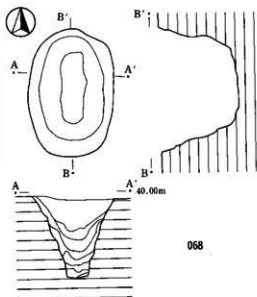
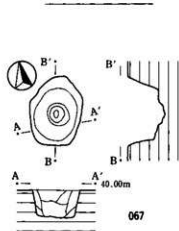
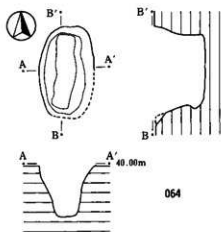
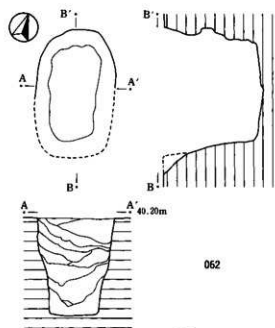
調査区中央やや西側、24W68・69区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.7m、短軸1.1m、深さ0.7mを測る。坑底は楕円形で、平坦である。中央に長径40cm、短径30cm、深さ20cmのピットが1つ確認された。長軸方位は、N-80°-Eを示す。覆土は暗褐色土が主体であり、壁際にローム主体の黄褐色土が堆積する。遺物は出土していない。

SK087 (第15図、図版5)

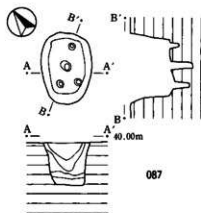
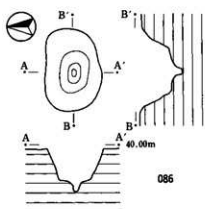
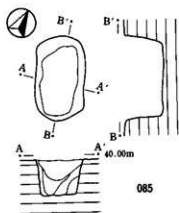
調査区中央やや西側、24W97区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸約1.7m、短軸1.0m、深さ0.9mを測る。坑底は隅丸長方形で、平坦である。中央に径20cm~10cm、深さ50cm~10cmほどの小ピットが4つ確認された。中央のピットが径、深さともに規模が大きい。長軸方位は、N-48°-Eを示す。覆土は上層が暗褐色土で、中層から下層はローム主体の黄褐色土が主体となる。遺物は縄文土器が少量出土した。

SK088 (第16図、図版6)

調査区やや北側、24X01区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.3m、短軸0.9m、深さ1.0mを測る。坑底は細長い隅丸長方形で、平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-74°-Eを示す。覆土は暗褐色土を主体とし、壁際にローム主体の黄褐色土が堆積する。遺物は出土しな



0 1/80 2 m



第15图 SK062·064·067·068·084·085·086·087

った。

SK089 (第16図、図版6)

調査区やや北側、23X91区、24X01区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸約1.8m、短軸0.9m、深さ0.7mを測る。坑底は隅丸長方形で、平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-11°-Wを示す。覆土は上層が黒褐色土及び暗褐色土で、下層はローム主体の黄褐色土が堆積する。遺物は縄文土器が少量出土した。

SK090 (第16図、図版6)

調査区中央やや北側、24X31・32・41・42区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約2.0m、短軸1.2m、深さ0.9mを測る。坑底は隅丸長方形を呈し、平坦である。北寄りで径20cm、深さ35cmの小ピットが1つ確認された。長軸方位は、N-5°-Wを示す。壁は短軸壁は急角度に立ち上がるが、長軸壁はやや角度が緩やかである。覆土は暗褐色土及び黒褐色土を主体とし、壁際にローム主体の黄褐色土が堆積する。遺物は出土しなかった。

SK091 (第16図、図版6)

調査区やや北側、23X90区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.6m、短軸1.2m、深さ1.0mを測る。坑底も楕円形を呈し、中央がやや深くなる。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-40°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

SK092 (第16図、図版6)

調査区中央やや西側、25X28区に位置する。SK083に南西側が切られる。平面形は細長い隅丸長方形を呈する。規模は長軸約1.9m、短軸0.7m、深さ0.8mを測る。坑底も隅丸長方形で、平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-70°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

SK093 (第16図、図版6)

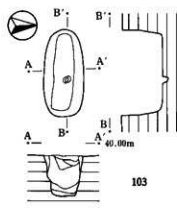
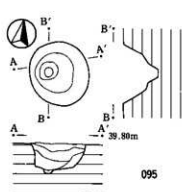
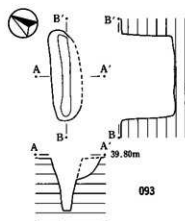
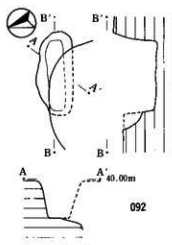
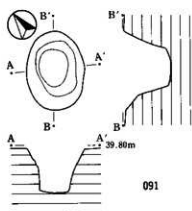
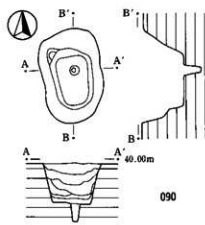
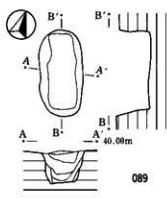
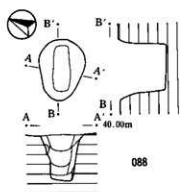
調査区北側、23X63区に位置する。平面形は、南東壁が攪乱を受けるが、細長い楕円形を呈すると推定される。規模は長軸約1.9m、短軸0.7m、深さ1.1mを測る。坑底は幅が狭く、平坦である。ピットは確認されなかった。長軸方位は、N-64°-Eを示す。壁は長軸壁が垂直に近く立ち上がる。遺物は出土しなかった。

SK095 (第16図、図版6)

調査区北側、23X60区に位置する。平面形は不整形を呈する。規模は径約1.3m、深さ0.6mを測る。坑底は円形状を呈し、中央がやや深くなる。西寄りに径40cm、深さ20cmのやや大きなピットが1つ確認された。長軸方位は、N-50°-Eを示す。覆土はローム主体の黄褐色土が主体である。遺物は出土しなかった。

SK103 (第16図)

調査区北側、24W13・14区に位置する。平面形は長い楕円形を呈する。規模は長軸約1.8m、短軸1.0m、深さ0.9mを測る。坑底は細長い隅丸長方形で、平坦である。中央やや東寄りで径15cm、深さ10cmの小ピットが1つ確認された。長軸方位は、N-82°-Wを示す。覆土は上層が暗褐色土で、中層から下層でローム主体の黄褐色土が主体である。遺物は出土しなかった。



0 1/80 2 m

第16圖 S K088・089・090・091・092・093・095・103

(2) 土坑

SK047 (第17図、図版6)

調査区中央南側、25X75区に位置する。SK057が南側に近接する。平面形は、楕円形が逆T字状に重なったような形状を呈する。おそらく2つの土坑が重複していると思われる。北側を047A、南側を047Bとする。047Aは長軸約1.4m、短軸1.2m、深さ0.7mを測り、047Bは長軸約2.6m、短軸1.0m、深さ0.5mを測る。坑底はそれぞれやや隅丸長方形を呈する。両方とも坑底は平坦である。遺物は、047Bの覆土上位と底面直上から縄文土器が少量出土している。

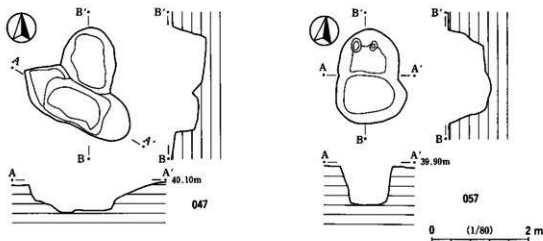
SK057 (第17図、図版6)

調査区中央南側、25X75・85区に位置する。SK047が北側に近接する。平面形は、中央で括れて北側が膨らむ瓢箪状を呈する。長軸約2.0m、短軸1.5m、深さ0.9mを測る。坑底は楕円形が重なったような形状を呈する。中央で段を有し南側が深くなる。北側壁際角に2つの小ピットが確認される。それぞれの深さは10cmほどである。遺物は、南側の覆土から約30点ほど縄文土器が出土している。

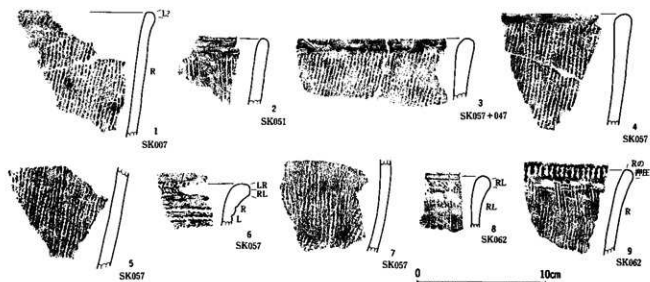
(3) 遺構出土土器 (第18図1～9)

縄文時代の陥穴及び土坑から出土した土器で図示できるものは少なく、明らかに遺構の時期と判断できる資料は乏しい。本遺跡から出土した縄文土器がすべて縄文早期燃糸文土器に限られることから、陥穴及び土坑は当該期のものである可能性が高いが、それぞれの土器は陥穴及び土坑に混入したものと考えられる。

1はSK007出土である。口唇部が若干肥厚する。磨減が著しいためよくわからないが、口唇部にLの燃糸が施文されていると思われる。井草II式であろう。2はSK051出土である。細いRの燃糸文が施文されている。稻荷台式である。3～7はSK057出土である。3は隣接するSK047から出土した土器片と接合している。3・4・5・7は夏島式である。6は口唇部に2段の縄文が施され、頸部にRLとLRの押圧縄文が施文されている。胎土は砂粒が多く、器面も粗い。井草I式である。8・9はSK062出土である。8は口唇部が肥厚し、外面にRLの単節縄文が施されている。9は口唇部がほとんど肥厚しない。軸に巻いたRの燃糸を押圧施文している。2点とも井草II式である。



第17図 SK047・057



第18図 遺構出土土器

4 包含層出土遺物

(1) 土器

発掘調査によって出土した縄文土器は、検出された遺構の覆土から出土したものを含めて総数3,694点であった。この総数は破片の大小を問わずにカウントした土器片数である。縄文土器の時期は縄文時代早期前半の燃糸文土器の時期に限られており、他の時期の土器は1点も検出されなかった。本遺跡周辺の縄文時代の踏遺跡と比べると、いずれの遺跡においても早期以外の時期たとえば前期諸磯・浮島式土器など出土量の多少はあるにしても必ずと言ってよいほど出土しており、この点からすれば早期前半の燃糸文期の土器群に限られる本遺跡の出土状況は特徴的であると言える。

ほぼ本遺跡が所在する台地全域で実施した確認調査の結果では、土器の出土点数は台地中央で多く、台地縁辺ではほとんど認められなかった。この結果から包含層の縄文土器を対象とする本調査は台地中央に限って実施した。詳しい分布状況については各分類の項で触れることにする。遺物を包含するII層は台地全域で認められた。厚さは10cm前後でほとんどの土器はII層下部から立川ローム最上層のIII層上面にかけて出土している。

土器のあり方は完形で出土したものはなく、すべて破片で出土している。個体の接合作業の結果では、ある程度の範囲で接合する個体がまとまって検出されているものの、復元が可能な個体は微量であった。また、土器の散布状況には粗密はあるものの多量に土器が「集積」していると認められる地点はないと言ってよい。

以下、出土した縄文土器について分類を行い分布状況を見ていくが、早期前半の燃糸文土器に限られていることからまず口唇部の状態が分類の目安となるのは言うまでもない。型式細分するのが難しい胴部破片については、補助的に援用していきたい。

第1類

口唇部が肥厚し強く外反するもので、口唇部から胴部にかけて縄文が施文されるものを本類とする。并

草式に比定される。本類は95点出土しており、全体の土器量の3%を占めている。分布状況は特に集中する地点はなく、散漫な出土状況である(第19図)。

本類は頸部文様帯の有無によって2種に分けられる。

第1類 a種 (第20図1~26)

口唇部、頸部、胴部の3つの文様帯を構成するものを本種とする。井草I式に比定される。本種と判断できるものは微量であり、そのほとんどを図示した。口唇部には2~3段の施文帯を伴い、単節縄文を回転施文するほかに縄文原体の押圧文を伴うものもある。頸部には横位、斜行のほかに縄文原体の押圧文を施文するものもある。また、1点だが施文方向を変えて羽状縄文のような効果を出している例がある。胴部はみな縦位の縄文を密に施文し、個体による差はあまり認められない。このほか頸部に指頭圧痕を伴うものが数点含まれている。胎土は砂がちで1mm前後の砂粒が目立ち、雲母を微量含むものが数点だが認められた。口唇部の文様について詳しく見ると、RLのみ又はLRのみの縄文原体による施文があり、RL原体を使う方が若干多いようである。また、両方の原体を使用している例もある。2段の回転縄文の間に原体の押圧文が施されるものもある。4・5・10・12には口唇部下に指頭圧痕を伴う。10は圧痕が特に強い例である。頸部文様帯に縄文原体の押圧文を施したものは微量である。9・25が2条、24が3条施文されている。24は器形が唯一復元できる例である。口径25.4cmを測る。頸部の押圧文は最上部がRL、下の2条がLRの原体である。9の頸部文様帯は施文方向を変えて羽状の効果を出しているものでこの1例のみである。

第1類 b種 (第20・21図27~71・91)

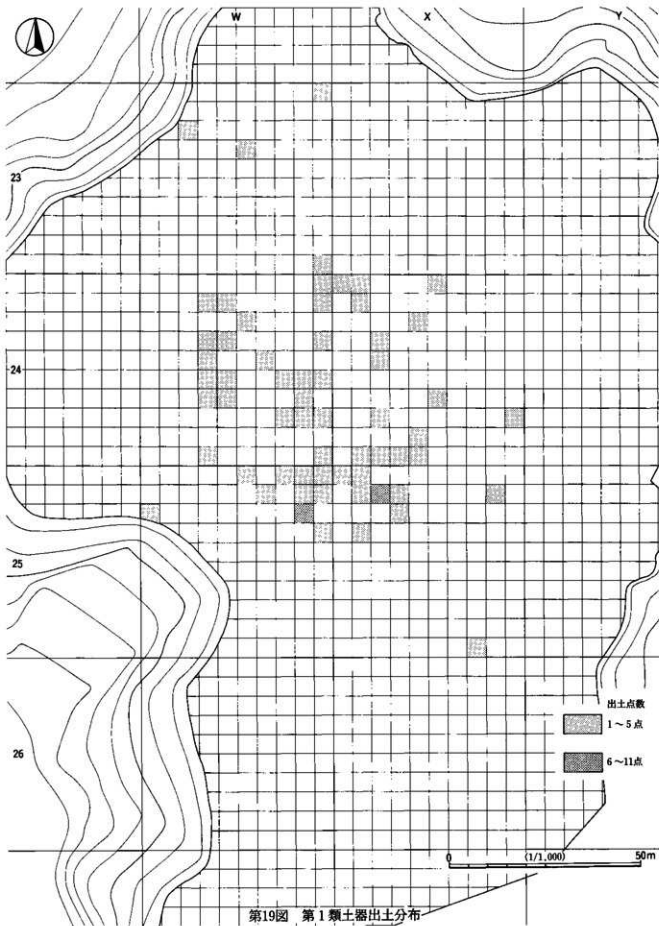
口唇部及び胴部文様帯からなり、a種に見られた頸部文様帯を持たないもので、縄文を施文するものを本種とする。井草II式に比定される。a種に比べやや個体点数は多い。文様の構成はa種に比べ単純である。口唇部には1~2段の施文帯を伴い、1段のものが主体である。単節縄文のRLが大半を占め、LRを回転施文した例は少量である。縄文原体の押圧文は64のみに認められるが、口唇部破片のためa種に含まれる可能性もあり、b種には押圧文の施文例はほとんどないと言ってよいであろう。胴部は縦位の縄文が密に施文される例が主体となる。a種に見られた頸部に強い指頭圧痕を施すものではなく、口唇部の外反はa種に比べゆるい。また、口唇部はあまり肥厚していない。

第1類 c種 (第21図72~79・82~90)

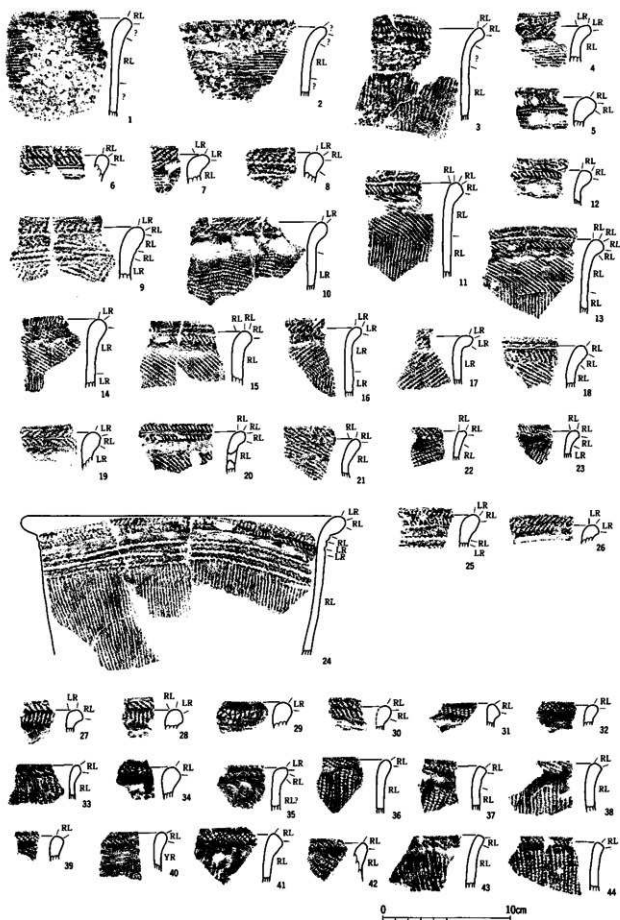
口唇部及び胴部文様帯からなり、a種に見られた頸部文様帯を持たないもので燃糸を施文するものを本種とする。文様の構成では井草式と言えるが、口唇部が肥厚しないものが多く、口唇断面の形態は夏島式から稻荷台式前後の特徴と共通する点がある。一応井草II式に含めたが検討の余地がある。個体点数は少ない。文様の構成は口唇部に1段の施文帯を伴い、以下縦位の燃糸が施文される。燃糸はRが大半を占め、Lの例は少量である。縄文原体の押圧文はない。胎土には1mm前後の砂粒を含むものもあるが、a種に比べ砂粒の混入量は少ない。76~78は同一個体であるが、口端が平らで肥厚している。82~89の胴部の燃糸文は条間隔があいており密に施文されていない。

第1類 d種 (第21図80・81・92~98)

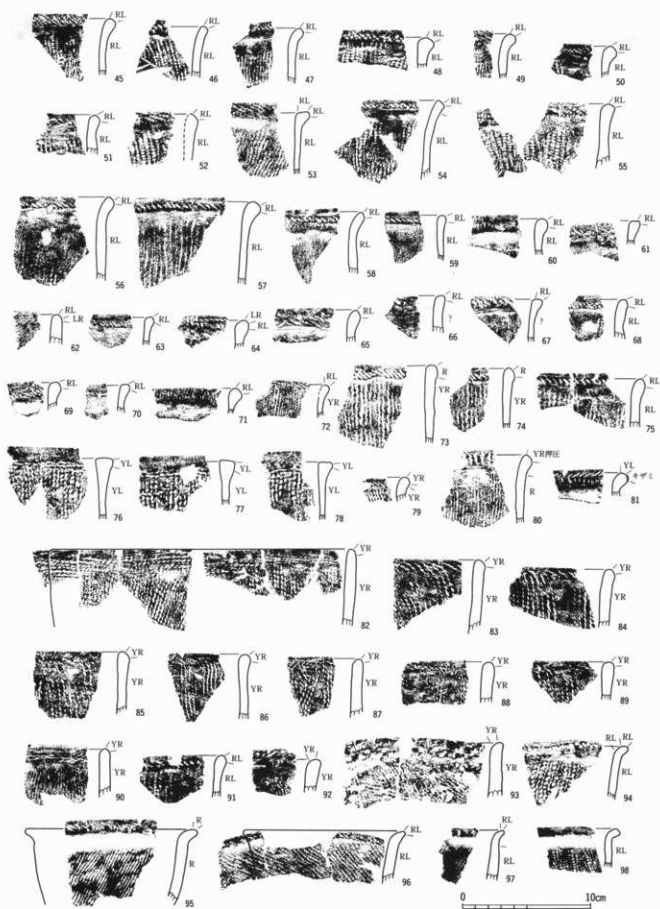
その他のものを本種とする。80は口唇部に軸に巻いた燃糸をそのまま押圧施文している。81の口唇部に2段の施文帯の一方に細かいキザミが施されている。92~95・97は外反する口唇部のやや内側に縄文ないし燃糸文を施文するものである。95は小型品である。96は口唇部の口端に施文されている。98は口唇部に



第19圖 第1類土器出土分布



第20図 縄文土器 1



第21圖 縄文土器 2

施文されているようだが判別できない。92～98の特徴として胴部に施文された縄文等が斜行する点で、本種がいわゆる井草Ⅱ式の範疇に含まれるか疑問が残るところである。

第2類

口縁部がほぼ直立するか若干外反するもので、口唇部から胴部にかけて単純な縦位の縄文や燃糸文が施されるものを本類とする。夏島式に比定される。本類は1,805点出土しており、全土器量の49%を占めている。分布状況は台地中央に集中しており、20点を越える破片が5グリッドから出土している(第22図)。口唇部はやや肥厚するが、その中には口唇部内面側に肥厚するものが認められる。胎土は石英砂が目立つものの第1類の井草式の胎土に比べれば精選されている。本類の土器は内面の調整が丁寧に行われているものが多く、口縁部内面の横位の調整痕が明瞭に残っている。口唇部は縄文などの施文後に口端を丁寧になでている。内外面の色調は茶褐色を呈する特徴的なものが多い。本類は縄文を施文するものと燃糸文を施文するものの2種に分けられる。

第2類 a種 (第23～26図99～276)

縄文を施文するものを本種とする。1,341点出土している。この点数の中には胎土、焼成、施文などの点から本類に含めた胴部破片が相当数含まれている。全土器量の36%を占めている。本種の特徴として内外面の色調が茶褐色を呈している点があげられる。他の類と容易に区別される。口唇部はやや肥厚するものの第1類のような強い外反は見られない。また、内面側に肥厚する例が目につく。102・109・112などが特徴的なものである。口唇部及び内面の調整は丁寧である。文様は単節縄文のRLないしLRを口唇部から密に施文している。RLを施文する方が多く、縄文原体の太さはほとんど変わらない。

第2類 b種 (第27・28図277～379)

燃糸文を施文するものを本種とする。464点出土している。この点数の中にはa種と同様に胎土、焼成、施文などの点から本類に含めた胴部破片が相当数含まれている。全土器量の13%を占めている。色調は赤褐色から褐色を呈するものが主体である。口唇部はやや肥厚するものの第1類のような強い外反は見られない。また、280や284ように口縁部外面のやや下にゆるいぐいげれがつくものもある。文様はRないしLの燃糸を口唇部から密に施文している。Rの燃糸が圧倒的に多い。燃糸原体の太さには個体差があり、301や303のような太い原体と、278や282などの細い原体とが認められる。

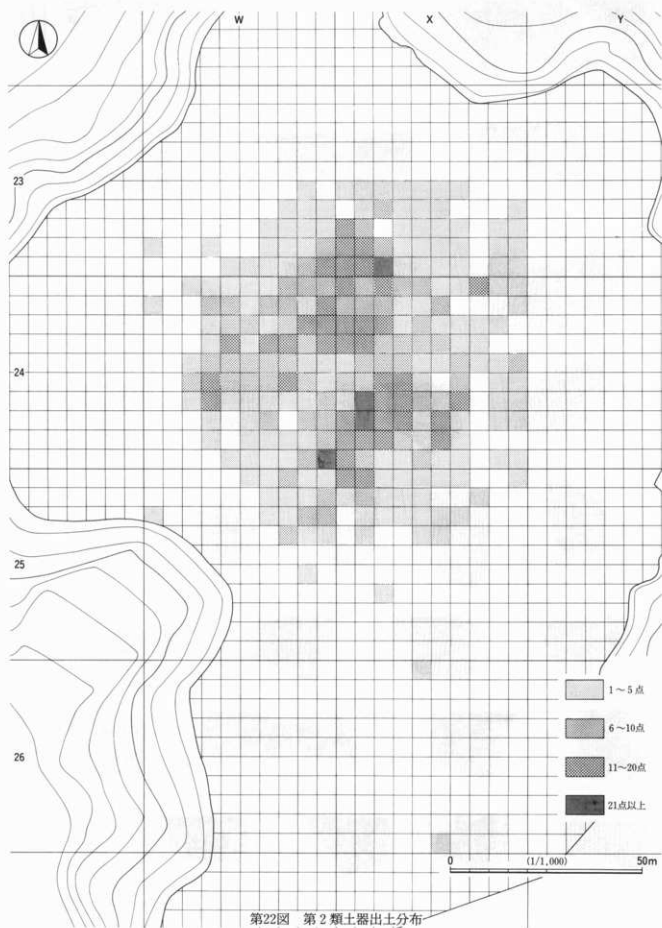
第3類

口唇部から胴部にかけて粗い縄文や条間隔が広い燃糸文が施されるものを本類とする。稲荷台式に比定される。口縁部がほぼ直立するか若干外反するもののほかにやや内湾するものもある。本類は573点出土しており、全土器量の15%を占めている。

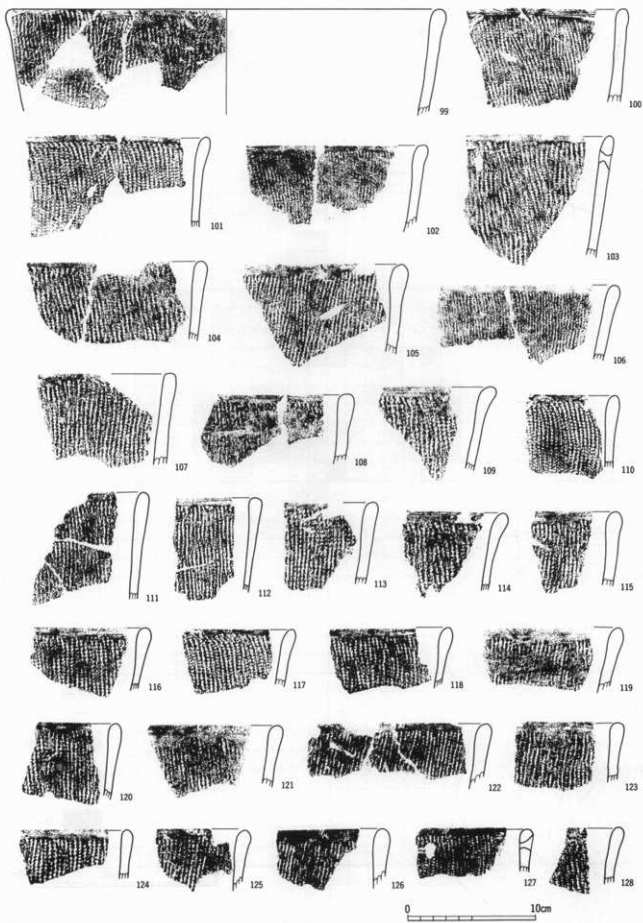
分布状況は20点を越えて出土したグリッドが1か所しかなく、それ以外は散漫な出土状況である(第29図)。口唇部はやや肥厚するが、胴部の厚みと変わらない厚さの例も目立つ。363のように口唇部内面側に肥厚するものも認められる。胎土は砂粒が目立つ例が少なく第1・2類に比べ精選されている。土器内面の調整は丁寧で、口縁部内面の横位の調整痕が明瞭に残るものもある。内外面の色調は赤褐色から褐色を呈する。本類は縄文を施文するものと燃糸を施文するもの、若干の無文帯をもつものなど3種に分けられる。

第3類 a種 (第30・31図380～422・464～470)

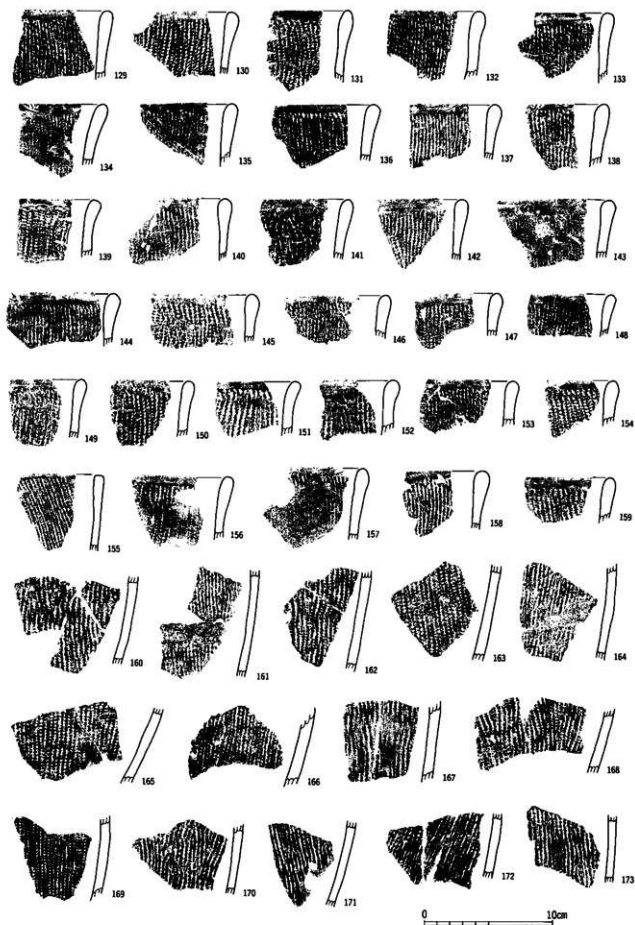
粗い縄文を施文するものを本種とする。229点出土している。この点数の中には胎土、焼成、施文などの点から本類に含めた胴部破片が含まれている。全土器量の6%を占めている。口唇部の形態は内面側に肥



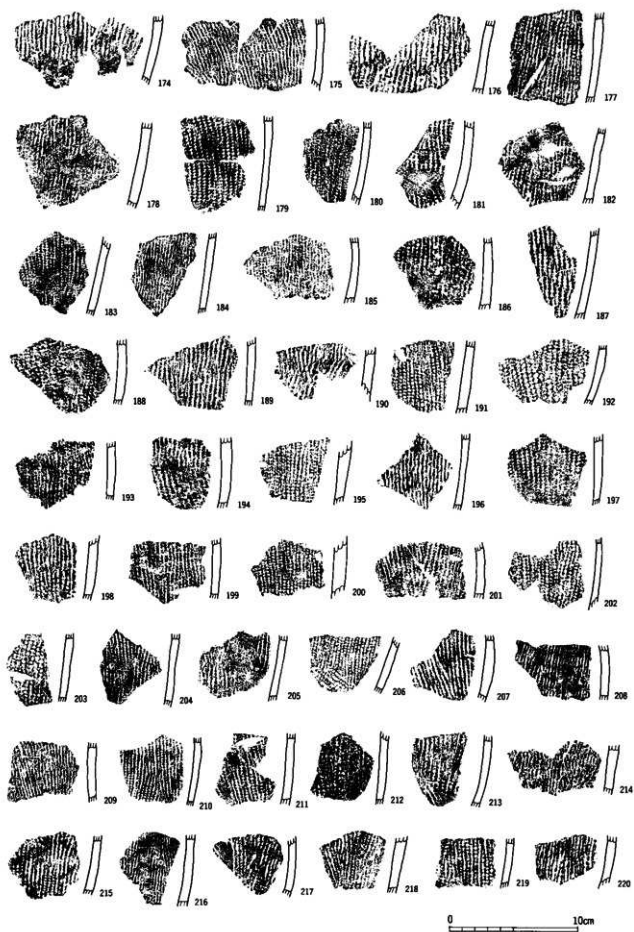
第22図 第2類土器出土分布



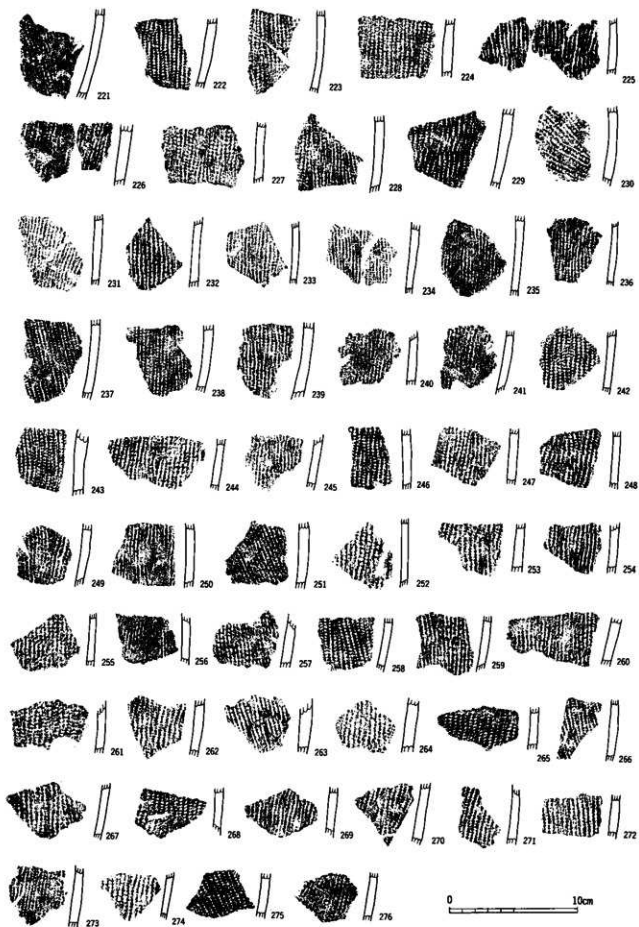
第23図 縄文土器 3



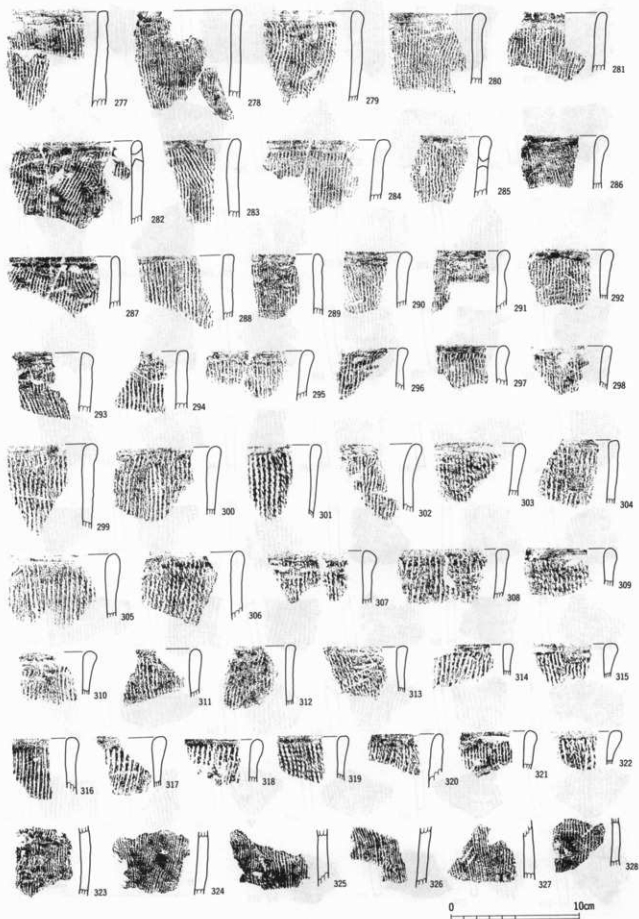
第24図 縄文土器 4



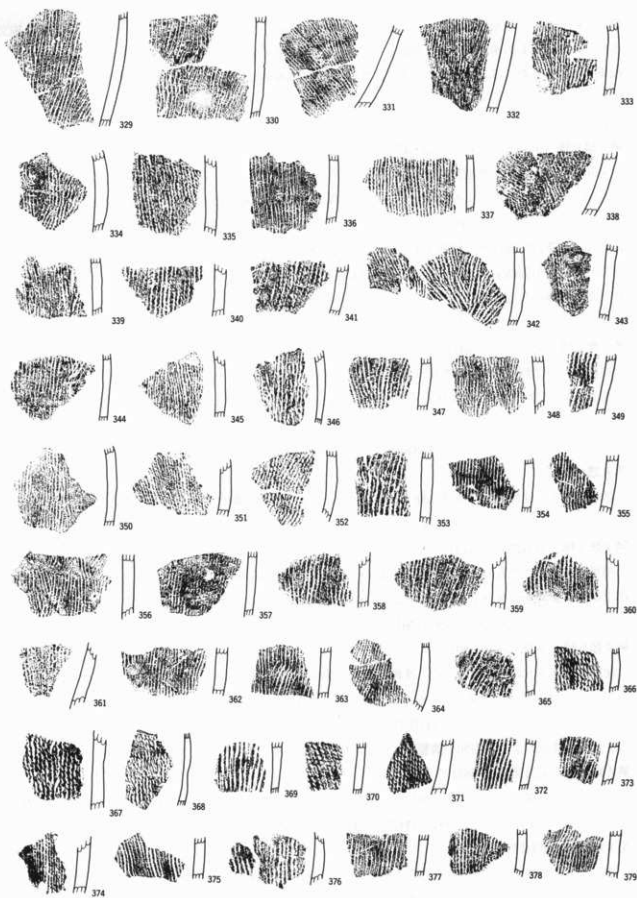
第25図 縄文土器 5



第26図 縄文土器 6



第27図 縄文土器 7



第28圖 縄文土器 8

0 10cm

厚しているもの、やや肥厚するもの、胴部の厚みとほぼ同じもの、角頭状を呈するものなどがある。施文される縄文はR Lの単節縄文が圧倒的に多く、Lの無節縄文などが含まれている。縄文は単純に縦位に回転施文されるもののほか斜縄文なども比較的多い。380の器形は口径を最大径とし、底部はやや尖る形態と思われる。口唇部は内面側に肥厚している。内面及び口唇部の器面調整は丁寧に行われている。398・399・464～470はLの無節縄文である。421・422は底部である。ともに回転痕を伴っている。

第3類b種 (第31・32図423～463・471～522)

条間隔のある燃糸文を施文するものを本種とする。344点出土している。全土器量の9%を占めている。口唇部の形態はやや肥厚するものが多く、内面側に肥厚しているものもあり、胴部の厚みとほぼ同じものも少なくない。施文される燃糸はRが多い。燃糸にはおおまかに3種類あり、比較的原体が太いものと細かいもの、条の間隔は密だが施文する原体の施文間隔が開いているものなどがある。456～463は同一個体である。Rの単節縄文が間隔をもって施文されている。胎土は砂粒が多い。471～522は胴部破片である。燃糸文の間隔があるものをあげたが、夏島式の燃糸文とは峻別しにくい。471は施文原体を斜方向に間隔をおいて施文しており特徴がある。一応本種に含めたが、似たような土器片が比較的多く出土している。

第3類c種 (第33図523～544)

口縁部外面に若干の無文帯を伴うものを本種とする。口唇部はやや肥厚するものが多く、外反するものもある。また532のように角頭状のものもある。胎土は個体によってまちまちである。523～525は同一個体である。口唇部内側に肥厚しており、無文部分は内面と同様に丁寧に器面調整されている。粗いL R単節縄文が施されている。528・534は指頭圧痕を伴う。

第4類

結条体条痕、沈線文及び特殊な縄文が施文されたもので、他の類に含めなかったものを一括する。43点出土しており、全土器量の1%である。

第4類a種 (第34図545～574)

結条体条痕を伴うものを本種とする。545・546は口唇部外面に斜方向に若干の施文を行ったのち、口縁部下から一挙に条痕を垂下させている。545・574はRの燃糸による条痕である。胎土は全体に砂がちである。口唇部形態から第3種すなわち稲荷台式に含まれるのではないと思われる。

第4類b種 (第34図575～580)

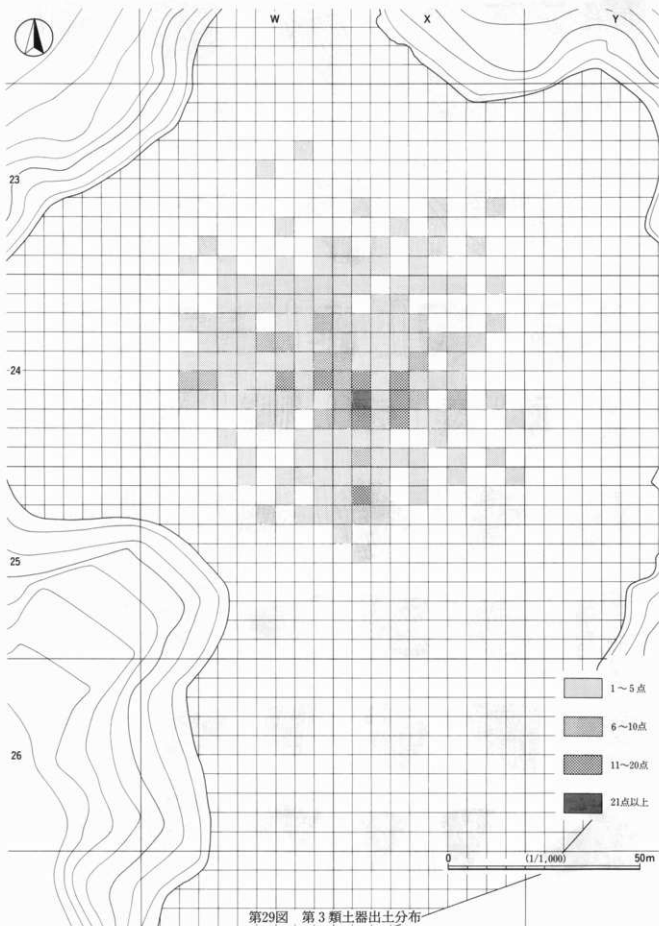
沈線文を伴うものを本種とする。沈線は細く先端が尖った工具による施文である。沈線の間隔は疎である。576の口唇部は外削ぎ状であるが実測部分がたまたま図の形態であり、他の部分はやや丸みがあって形態は不安定である。575・577の口唇部は胴部の厚みとほとんど変わらない。また、575はやや内湾ぎみである。胎土は比較的良好、内面の調整はよい。本種はいわゆる「木の根式」と言われるものである。

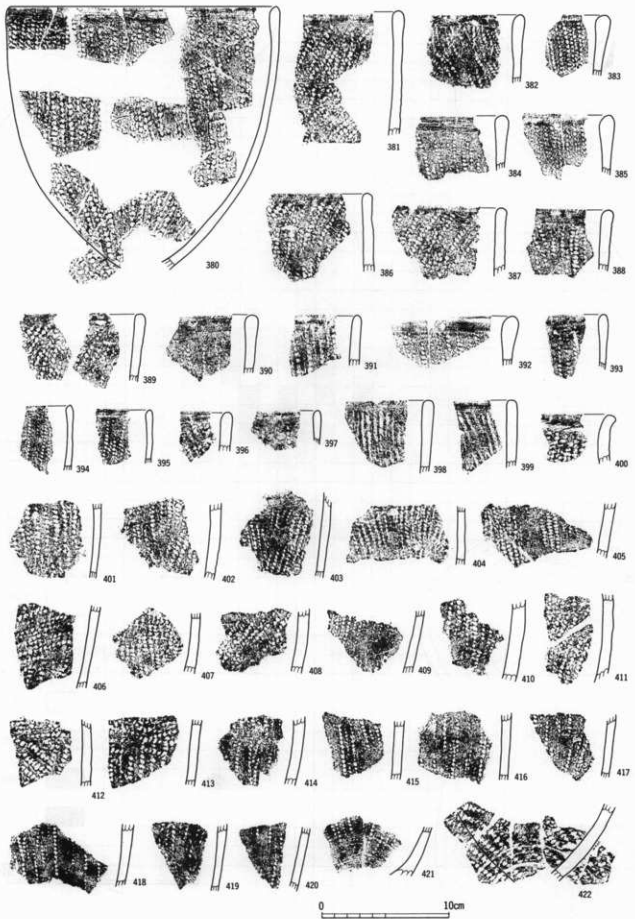
第4類c種 (第34図581～585)

ごく細いRの縄文原体で一部に綾杉状の文様が回転施文されているものを本種とする。1個体分の破片と思われる。小型品である。581の口唇部は内面側にやや肥厚し、内湾ぎみである。胎土は砂が多い。

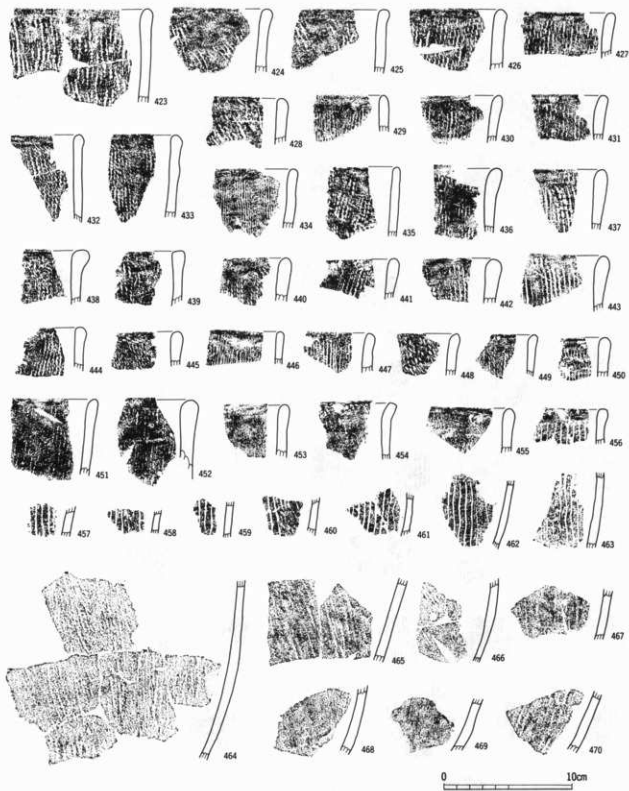
第4類d種 (第34図586)

細かい条線が施文されているものを本種とする。口唇部は外半し、若干肥厚している。くびれ部は指による横位のナダが行われており、その下から条線を施している。胎土には砂が多い。

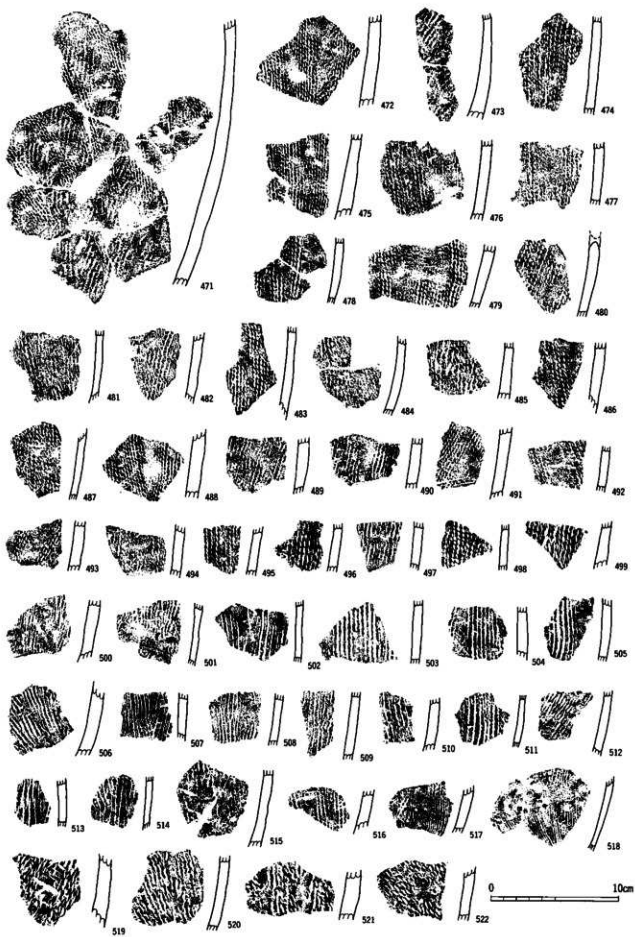




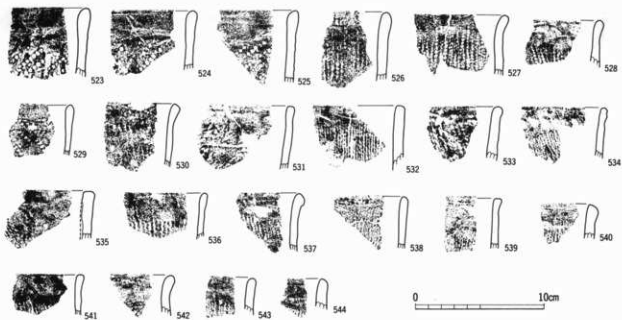
第30圖 縄文土器 9



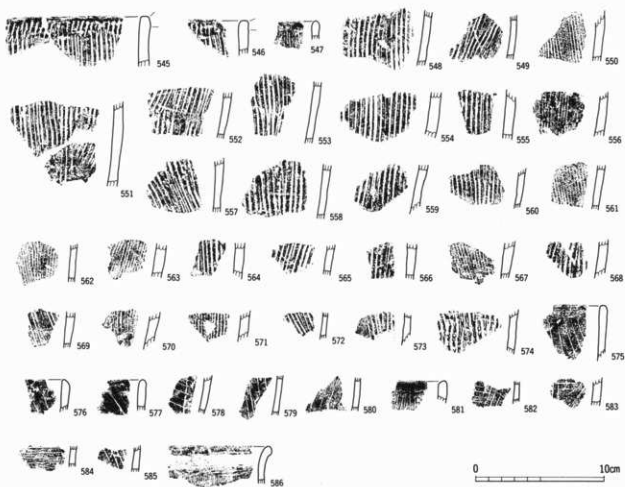
第31图 縄文土器 10



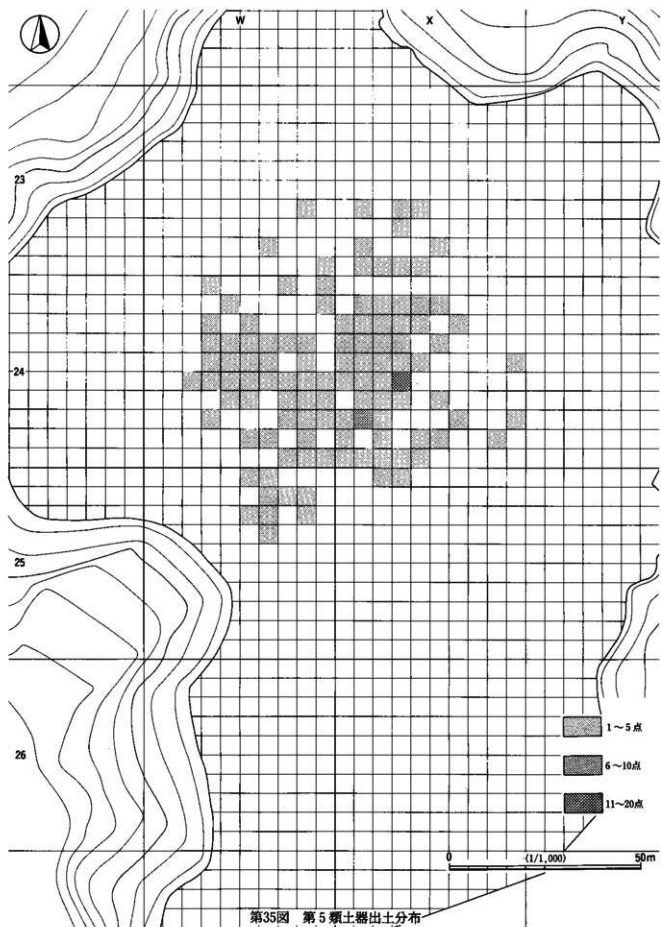
第32図 縄文土器 11

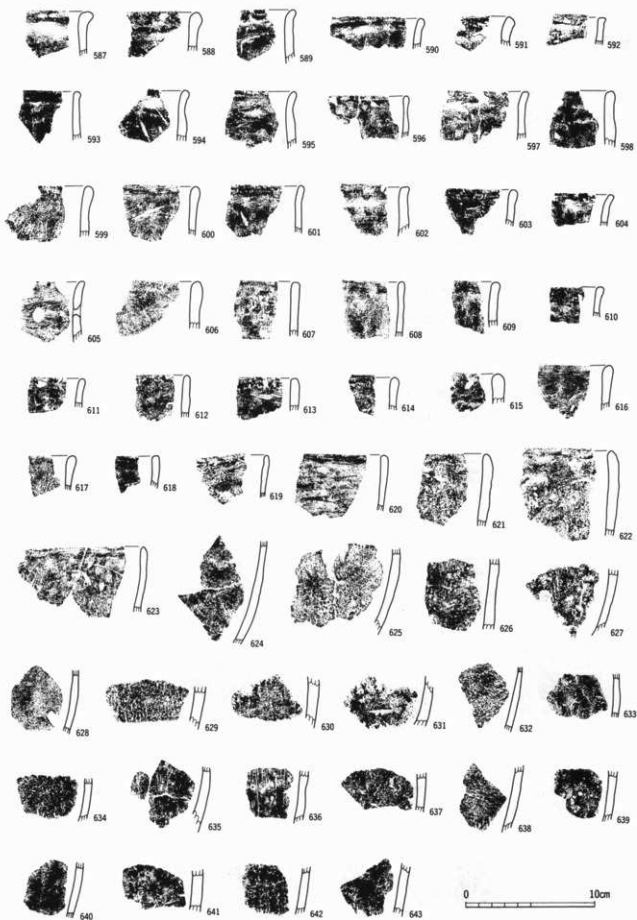


第33図 縄文土器 12



第34図 縄文土器 13





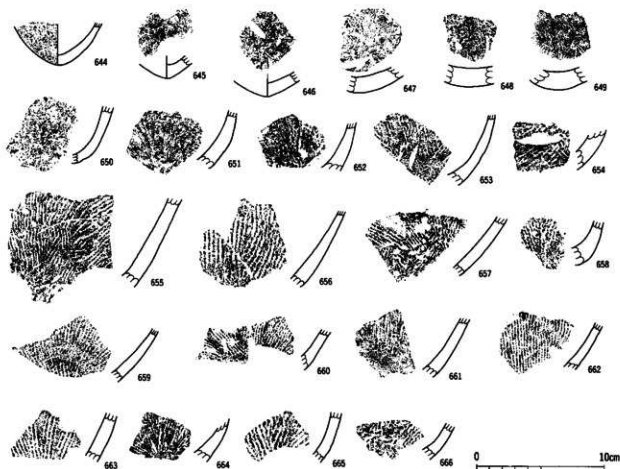
第36図 縄文土器 14

第5類 (第36図587~643)

無文の土器を本類とする。262点出土している。全土器量の7%を占めている (第35図)。土器の形を知り得る個体は1点もなく、小さな破片となって出土しているものが大部分である。口縁部を中心に拓本を掲げたが掲載可能な口縁部破片はわずかな量である。土器の厚さは総じて薄く、他の類に比べ小型のものが多くある。また、指頭痕を残すものも多い。口唇部の形態は肥厚して強く外反するもの、若干肥厚するもの、口縁部下にくびれがあるもの、ほぼ直立するもの、外反するもの、内湾するものなどがあり、多型式にわたっていると考えられる。口縁部の断面の形態から587・588などは第1類に相当する。599~617は第2類から第4類に相当する。618~623は内湾しており、時期的には新しい様相であろう。

第6類 底部 (第37図644~666)

底部が丸底となる時期であるため、小破片の場合胴部か底部かを区別するのは難しい。このため、明らかに底部と判断できるもの、または最底辺に近いと判断できるもののみカウントした。点数は84点である。このうち底部の形態を知りえるほどの遺存のよいものは少なく、図示できたものは数点にとどまっている。時期は底部の文様から判断するのは難しく、また型式別に底部形態を分類することは困難である。644~652は底部の最底辺である。文様はほとんど施文されていない。644~646はやや先端が尖るが、大部分は647~649のような丸底で胴部との峻別は難しいものである。653~666は底片に近い部分である。これらからするとかなり底辺に近い部分まで施文されていることがわかる。

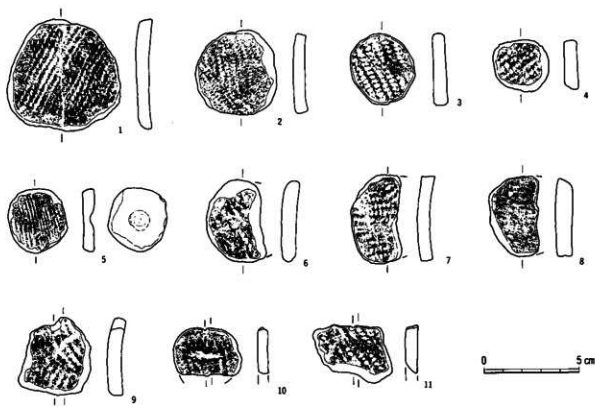


第37図 縄文土器 15

土器片円盤・土器片鍾 (第38図1～11、表6、図版13)

1～8が土器片利用円盤、9～11が土器片鍾である。土器はすべて夏島式土器を加工していると思われる。1～5が完形、6～8は約半分が欠損している。3～5の側縁は丁寧な調整が行われている。5は内面側中央に回転運動による凹みができている。穿孔する意図があったのかもしれないが、円盤として加工する段階でつけられた凹みであるとは断定しきれない。

9～11は側縁を調整した上でわずかなキザミが施されており、土器片鍾と考えられる。9・10は欠損している。側縁の加工はあまり丁寧には行われていない。なお、出土位置及び計測値については第6表にとりまとめた。



第38図 土器片円盤・土器片鍾

第6表 土器片円盤・土器片鍾計測表

編號 番号	出土位置	最大長 mm	厚さ mm	重量 g	編號 番号	出土位置	最大長 mm	厚さ mm	重量 g
1	25X-01	59.2	6.9	76.7	7	23X-60	45.7	7.9	(11.3)
2	24X-91	43.1	6.7	18.0	8	25X-13	40.6	8.5	(11.1)
3	24W-53	35.1	7.0	11.0	9	24X-71	40.2	8.1	14.1
4	23X-71	27.7	8.2	7.1	10	24W-79	34.6	5.4	(6.4)
5	24W-54	33.0	6.1	7.5	11	24W-53	40.0	7.6	(10.0)
6	表採	42.2	7.2	(10.7)					

(2) 石器 (第39・40図、表7、図版13・14)

本遺跡から出土した石器は総点数29点を数える。ほかに礫119点が検出されている。器種構成は石礫3点、削器2点、打製石斧4点、磨製石斧1点、敲石2点、磨石5点、剥片9点である。多くは包含層を中心とするグリッド一括の資料である。主要な利器として打製石斧(礫石斧)の出土量がややまとまる。ほかの石器はごく少量の出土であり、特徴的な器種構成は看取されない。分布状況は調査区の北側にややまとまりが認められる。しかし、各器種の分布では、それぞれがごく少量の出土のため特徴的な分布の集中は見られない。これらの石器の分布は、本遺跡の出土縄文土器の主体を占める縄文時代早期前半の撚糸文土器群の分布とおおむね一致している。石器の帰属する時期は縄文早期前半の時期の可能性が高い。

石礫 1～3は石礫である。1はチャート素材とする。基部が浅く抉れ、両側縁が弧を描いて浅く抉れ、脚部と先端部が尖る形態である。表裏面中央に擦痕が明瞭に観察され、局部磨製石礫の範疇に属するものである。2は凸基のもので、平面形状は両側縁下半部が抉れ五角形状を呈する。3は石礫未成品であろう。縦長剥片を素材とする。

削器 4・6は削器である。4は厚手の縦長剥片を素材として、左側縁から先端部にやや急角度の調整加工が連続する。6は小振りの偏平礫を素材としている。礫の屈曲を利用して右側縁に交互からの平坦調整により刃角を鋭角にしている。

磨製石斧 5は磨製石斧である。小形偏平礫を素材とし、全面が研磨され整った形状を呈している。右側縁には幅広い調整と敲打痕が観察される。刃部は部分的に剥落する。

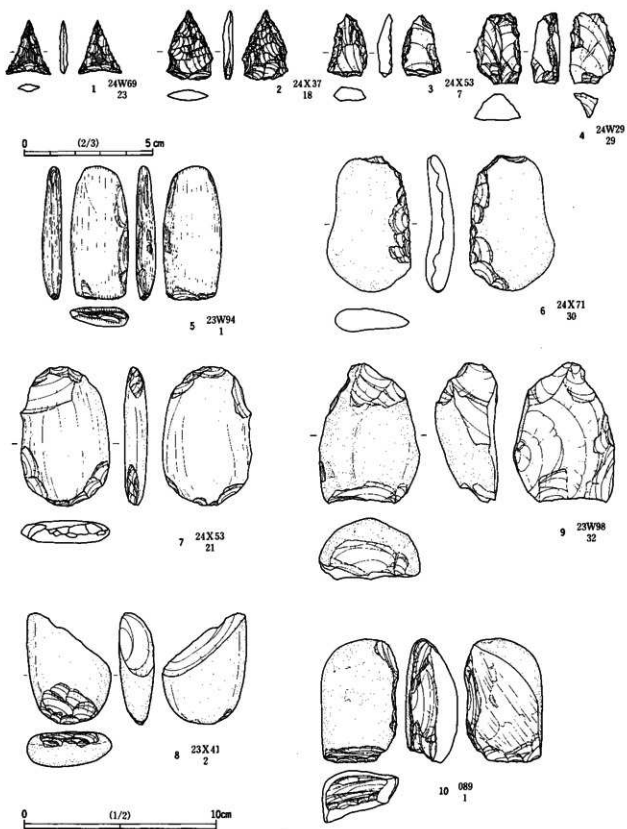
打製石斧 7～10は打製石斧である。すべていわゆる礫石斧に属するものである。7は扁平な槽円礫を素材として、器体長軸の縁辺に平坦調整が集中する。両刃的なものか、上下端部が突出する。8は下端部に集中的に調整加工を施し刃部を鋭角にしている。器体は中央で斜めに欠損し、あるいは未成品的なものかもしれない。9・10は厚味のあるものである。9は裏面が剥離面となり、下端に急角度で幅広い加工を施しやや抉れた刃部を形成する。10は右側縁と下端に調整加工が顕著で、刃部は鈍角である。

敲石 11・12は敲石である。11は大形のもので下端部に敲打痕と剥離痕が顕著である。12は割れ面の端部が潰れ、敲打痕とやや細かな剥離痕が看取される。

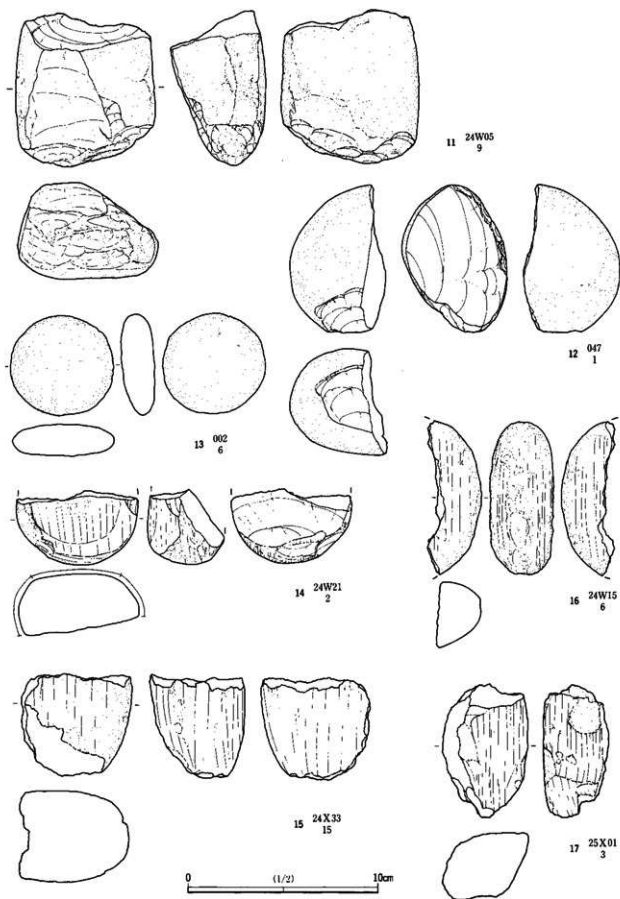
磨石 13～17は磨石である。13は完形品であり、扁平な円礫の表裏に擦り面が見られる。14・16は器体を大きく欠損するが、表裏の擦痕が顕著で石礫状の形態を呈するものと思われる。15・17も欠損品であるが、15は厚味があり全面を擦面とする。17は擦り面が平坦で、各擦り面が稜を形成して角張る。

第7表 縄文時代石器属性表

番号	遺物番号	器種	石材	最大長さ mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打角	調整角	使用痕の有無	剥離痕の有無	折れ目の有無
1	24W690023	石礫	チャート	21.2	17.0	2.9	0.6					
2	24X379018	石礫	黒曜石	27.5	17.9	4.0	1.6					
3	24W339007	石礫	チャート	25.0	15.2	5.9	2.0					
4	24W299029	削器	水晶	28.2	18.5	11.0	5.9	90	58			
5	23W940001	磨製石斧	砂岩	69.4	30.4	9.9	35.6		63			
6	24X710036	削器	砂岩	71.0	44.1	15.0	44.6					
7	24X330021	打製石斧	ホルンフェルス	72.0	45.3	11.9	62.1					
8	23X410002	打製石斧	砂岩	58.2	44.2	17.8	46.2					
9	23X980032	打製石斧	ホルンフェルス	72.3	52.8	32.4	138.2					○
10	9890001	打製石斧	ホルンフェルス	64.3	40.2	27.1	93.2					
11	24W050009	敲石	水晶片	82.4	73.0	49.7	377.8					○
12	0470001	敲石	砂岩	77.0	51.0	55.4	249.8					
13	0020006	磨石	山岩	52.2	53.8	17.5	60.9					○
14	24W210002	磨石	砂岩	39.0	64.0	40.1	117.2					○
15	24X330015	磨石	山岩	53.5	58.3	50.0	183.1					○
16	24W150006	磨石	流紋岩	79.8	28.2	33.9	88.8					○
17	25X610003	磨石	砂岩	69.2	45.2	34.5	123.6					○



第39図 縄文時代石器 1



第40圖 繩文時代石器 2

IV 古墳時代

1 遺構とその出土遺物

本遺跡で、古墳時代の遺構としたものは、住居跡が1軒検出されたのみである。住居跡は7世紀後半に営まれたものである。

(1) 住居跡

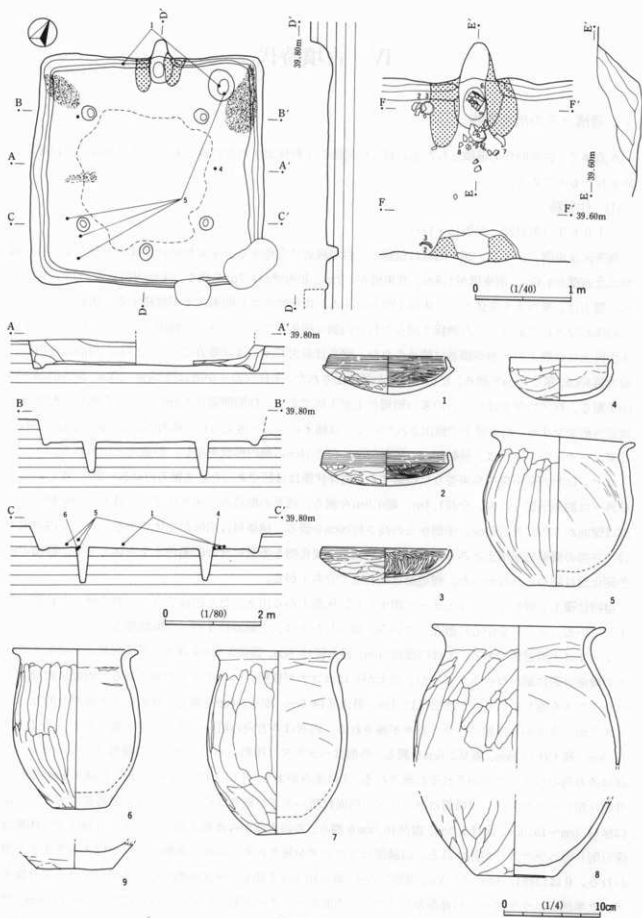
SI061 (第41図、図版15・17)

調査区北東隅、24Y25・26・35区に位置し、台地縁辺に立地する。平面形状はほぼ正方形を呈する。規模は北西壁が4.6m、南東壁が4.8m、北東壁が4.7m、北西壁が4.7mを測る。主軸方位はN-25°-Wである。覆土は、黒色土を主体とし、床面上位がロームと炭化物を含む明褐色土が堆積する。床面はほぼ平坦で粘床がなされており、一点鎖線で囲んだ柱穴内側は硬化していた。カマド側両コーナーを中心として、床面直上には焼土の分布が顕著に認められた。壁高は最大47cm、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周し、最大幅40cm、深さ10cmを測る。ピットは6か所検出された。主柱穴の4か所は径25cm~30cm、深さ64cm~74cmを測る。柱穴の覆土はロームの多い暗褐色土が主体である。柱間間隔は2.2m~2.6mを測り、配置はほぼ正方形を呈する。南東壁下で検出されたピットは梯子ピットと考えられ、最大径32cm、深さ24cmを測る。北東コーナーのピットは、長軸70cm、短軸52cm、深さ34cmの楕円形状を呈し、貯蔵穴と思われる。

カマドは北西壁中央やや東寄りに位置する。遺存状態は良好であった。主軸方位はN-20°-Wである。壁外へは約36cm掘り込み、全長1.4m、幅0.9mを測る。底面の掘り込みの深さは浅く、最大5cmを測る。袖部は壁面からの長さ約64cm、床面からの高さ約26cmを測る。構築材は山砂が主体である。カマド内の覆土は天井部の構築材崩壊土とみられる山砂・焼土粒・炭化物を多量に含む暗褐色土を主体とする。底面の赤色硬化面は認められなかった。煙道部は約48度で立ち上がる。

遺物は覆土下層からややまとまって出土した。床面上から出土したものは少なく、やや浮いた状態で出土している。カマドを中心に散在している。図示したのは、土師器杯4点、土師器壺5点である。

1~4は土師器杯である。1は口径12.4cm、最大径13.8cm、器高3.9cmを測る。外面底部から受部まではナデ後部分的に細かなヘラケズリが、立上がりはヨコナデ後粗いヘラミガキが施される。内面は斜交するヘラミガキを施している。2は口径13.1cm、最大径14.0cm、器高3.6cmを測る。外面がナデ後部分的なヘラケズリが、立上がりは粗いヘラミガキが施される。内面は多方向の粗いヘラミガキが施される。3は口径13.4cm、最大径13.9cm、器高3.6cmを測る。外面はヘラケズリ後粗いヘラミガキ、口縁部はヘラミガキ、内面は多方向のヘラミガキがそれぞれ施される。4は歪みがあるが、口径10.5cm~10.9cm、器高4.4cmを測る。外面は粗いヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、内面は粗いナデが施される。5~9は土師器壺である。5は口径14.1cm~15.0cm、底径5.2cm、器高16.0cmを測る。外面底部から体部下端はヘラケズリ後ナデ、体部は深い削りのヘラケズリが施される。口縁部はヨコナデが施される。内面は無数のスジが付きヘラナデと思われる。6は口径13.1cm~14.2cm、底径5.7cm、器高16.6cmを測る。外面底部から下半部がヘラケズリ後ナデ、上半部がヘラケズリ、口縁部がヨコナデ、内面がヘラナデが施される。7は口径13.5cm~14.5cm、底径5.7cm、器高19.1cmを測る。底部から外面下部がヘラケズリ後ナデが施される。口縁部内面にヘラケズリ



第41图 S I 061

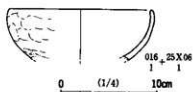
が見られる。8は同一個体のものであり、口径18.2cm、底径7.9cm、推定器高26cmを測る。外面底部がヘラケズリ後ナデ、体部がヘラケズリが施される。口縁部ヨコナデが施される。内面口縁部下にはヘラケズリが施される。内面にはヘラケズリが施される。9は底部片である。厚手の底部で大形の甕になると思われる。底部外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデが施される。

2 その他の出土遺物

(1) 土器 (第42図、図版17)

グリッドから少量の古墳時代土器が出土している。器形が復元できる1点を図示した。

1は土師器杯である。S D 016と25 X 06区から出土したものが接合している。体部1/4が残存している。推定口径は14.7cmである。外面はヘラケズリ後ナデが施され、内面はナデが施される。内外面ともに赤彩される。



第42図 グリッド出土土器

V 中世以降

1 概要

本遺跡の中世以降の遺構は、土坑墓2基、掘立柱建物跡1棟、土坑12基、土坑群1群、土坑列2列、溝13条などである。これらの遺構は、掘立柱建物跡以外に明確に伴出する土器等がなく時期を確定できるものが少ない。しかし、土坑墓を除いたそれぞれの遺構は、遺構の形態や周辺から出土する土器から近世の所産と考えられるものである。土坑墓は中世の所産と考えられる。

2 遺構とその遺物

(1) 土坑墓

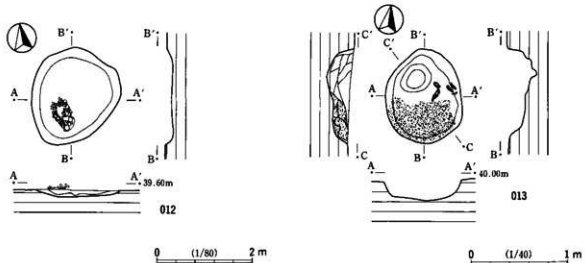
SK012 (第43図、図版15)

調査区中央西側、25W38区に位置する。SK013が北東側に近接する。平面形は楕円形を呈する。長軸2.0m、短軸1.8m、深さ0.2mを測る。底面は比較的しっかりしておりほぼ平坦である。壁は不明瞭でなだらかに立ち上がる。覆土は上層に明褐色土、下層にローム主体の黄褐色土が堆積していた。

遺物は、南側壁寄りで馬骨が出土している。馬歯がほとんどであり、上歯と下歯が噛み合わさるように検出された。一部下顎骨が残存する。ほかに遺物は出土しなかった。

SK013 (第43図、図版15)

調査区中央西側、25W26・27区に位置する。SK012が南東側に近接する。平面形は楕円形を呈する。長軸2.0m、短軸1.6m、深さ0.2mを測る。底面は北側が楕円形の浅いピット状に落ち込む。覆土は、黒色土、黒褐色土、暗褐色土を主体としている。南側の底面が浅い部分に炭化物を主体とする暗褐色土が分布し、壁には焼土層が残存する。この炭化物層は北側の深い部分の暗褐色土層の下に入り込むように堆積する。



第43図 SK012・013

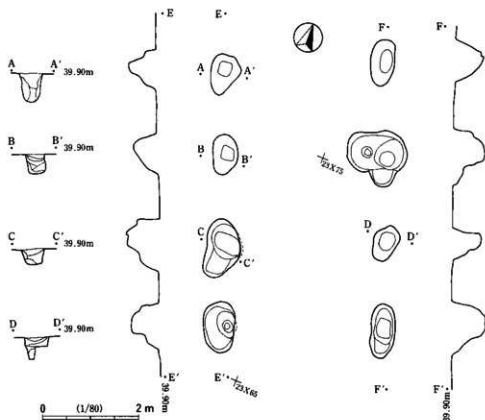
遺物は、西側壁寄りで馬骨が出土している。馬歯と足骨が少量検出されている。馬歯は下歯であり、下顎骨はほとんど残存しなかった。骨の焼成の有無は遺存状態が悪く明確ではないが、馬骨・馬歯の下部に炭化物が多くあることから、炭化物層の形成後に馬歯・馬骨が置かれた可能性が高い。他に遺物は出土しなかった。

(2) 掘立柱建物跡

S B 0 7 3 (第44図、図版15)

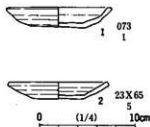
調査区北端、23X54・55区から23X64・65区に位置している。台地縁辺のほぼ平坦面に立地する。東側梁行1間(3.4m)×桁行3間(5.6m)の比較的大形の建物である。面積は約19㎡である。桁行主軸方位はN-21°-Wである。南側、北側の大棟持柱は確認されていない。西側梁行の柱間寸法はほぼ等間隔で1.8m、桁行の寸法は3.3mを測る。柱穴の配置はほぼ整然としている。柱穴は、形状が開口部で桁行方向に長い楕円形を呈し、底面で方形または楕円形を呈する。径80cm~120cm、深さは50cm~70cmを測る。柱痕や抜き取り痕は検出されなかった。覆土は、上層がロームを少量含む暗褐色土を主体とし、下層は黄褐色土となる。

遺物は、南西端柱穴の底面からカワラケが2つに割れて1個体出土した。また、23X65区からもカワラケが1個体検出されており、本遺構に伴出する遺物と考えられる。



第44図 S B 0 7 3

第45図1・2はカワラケ小皿である。1は口径11.0cm、底径6.0cm、器高2.2cmを測る。底部は回転糸切りである。薄手で内面は中心と立上がり部分がくぼみ、緩やかに立ち上がる。2は体部を2/3欠損し、推定口径10.6cm、底径5.0cm、器高1.8cmを測る。底部は回転糸切りと思われる。薄手で内面は底部中心から1/2ほどの部分と、立上がり部分がくぼみ、緩やかに直線的に立ち上がる。口縁端部は角張る。2点とも、17世紀後半から18世紀代のものである。



第45図 SK073出土土器

(3) 土坑

SK008・010・034・083は形態が類似し、便宜的に先にまとめて記載していく。

SK008 (第46図、図版16)

調査区南端、27X31区に位置する。平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸2.2m、短軸2.0m、深さ2.4mを測る。底面は平面形が整った長方形を呈し、平坦である。壁は多少の段を持ちながら急角度に立ち上がる。開口部の下位から方形に掘り込まれている。覆土は最上層が暗褐色土で、中層から下層がローム土、ロームブロック主体の黄褐色土になり、最下層は締まりのない暗褐色土が堆積する。覆土中位の層(スクリーントーンで図示した層)は青灰色の砂質火山灰層で、宝永の火山灰層である。上下の黄褐色土層に挟まれて堆積していた。遺物は出土しなかった。

SK010 (第46図、図版16)

調査区中央西側、25X88区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸2.5m、短軸2.1m、深さ2.5mを測る。底面は不整な長方形を呈し、平坦である。壁は急角度に立ち上がり、中位の段から上はやや広がる。中位から底面にかけては方形に掘り込まれている。遺物は鉄砲玉が1点出土した。

SK034 (第46図、図版16)

調査区南西側、25X60区に位置する。平面形は方形に近い楕円形を呈する。規模は長軸1.9m、短軸1.8m、深さ2.7mを測る。底面は、平面形が南北がすばまる方形を呈し、平坦である。壁は垂直に近く立ち上がり、開口部でやや広がる。上位から底面にかけて方形に掘り込まれている。遺物は出土しなかった。

SK083 (第46図)

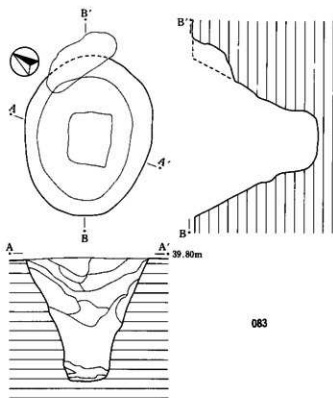
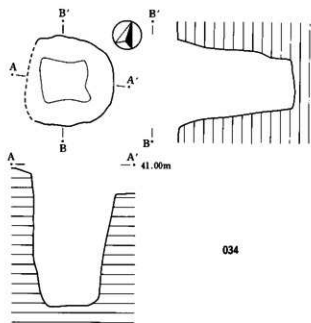
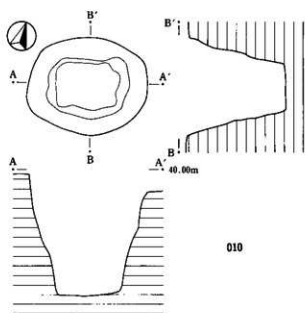
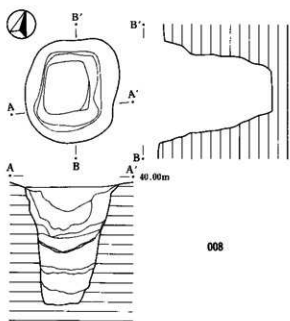
調査区南端、25X27・28・37・38区に位置する。SK092を切っている。SD016が北西側に近接する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸3.4m、短軸2.7m、深さ2.6mを測る。底面は整った長方形を呈し、立上がり部分が丸味を帯びるがほぼ平坦である。壁は下位がほぼ垂直で、中位で段を持って開きながら立ち上がる。下位は方形に掘り込まれている。覆土は、最上層にローム主体の黄褐色土が堆積するが、他の層は上層から下層まで暗褐色土を主体とする。遺物は土器片が少量出土した。

SK037 (第47図)

調査区南側、26X66区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約2.2m、短軸2.0m、深さ0.5mを測る。底面は楕円形を呈し、南東側に向かって深くなる。北西隅に浅いピットが1つ確認された。壁は湾曲しながらやや急角度に立ち上がる。覆土は上層に黒色土及び暗褐色土が、下層にロームを含む黄褐色土が堆積する。遺物は出土しなかった。

SK043 (第47図)

調査区中央南側、25X82区に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.1m、短軸0.8m、深



0 (1/80) 2 m

第46図 S K008・010・034・083

さ0.5mを測る。底面は楕円形を呈し、中央がやや深くなる。壁は直角に近く立ち上がる。覆土は上層に暗褐色が、下層にローム主体の黄褐色土が堆積する。遺物は出土しなかった。

S K 0 6 3 (第47図)

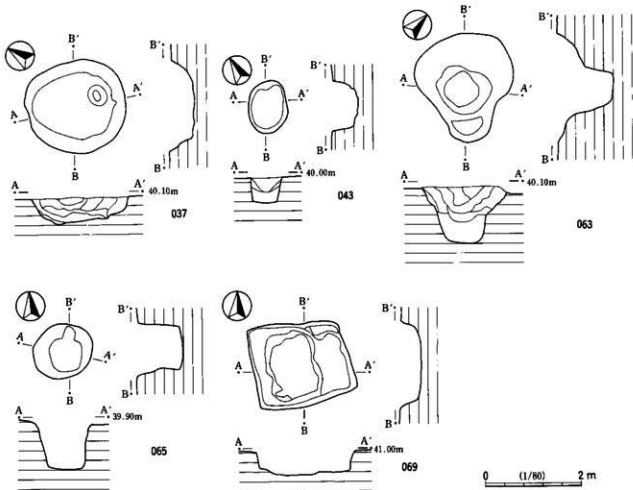
調査区北側、24X33・34区に位置する。平面形は南東側が突出する楕円形を呈する。規模は長軸約2.3m、短軸2.1m、深さ1.2mを測る。底面は隅丸方形で、ほぼ平坦である。壁は下位で急角度に立ち上がり、中位から開口部まではやや急に広がる。覆土は上層に暗褐色土が、下層にローム主体の黄褐色土が堆積する。遺物は出土しなかった。

S K 0 6 5 (第47図)

調査区中央東側、24X89区に位置する。平面形は円形を呈する。規模は径約1.2m、深さ1.0mを測る。底面は北側が突出した円形で平坦である。壁は垂直に近く立ち上がる。遺物は出土しなかった。

S K 0 6 9 (第47図)

調査区中央東側、24X82・92区に位置する。平面形は長方形を呈する。規模は長軸約2.0m、短軸1.8m、深さ1.0mを測る。底面は、西寄りに南北を軸とする長方形の浅い掘り込みがある。壁は垂直に近く立ち上がる。遺物は出土しなかった。



第47図 S K 037・043・063・065・069

(4) 土坑群

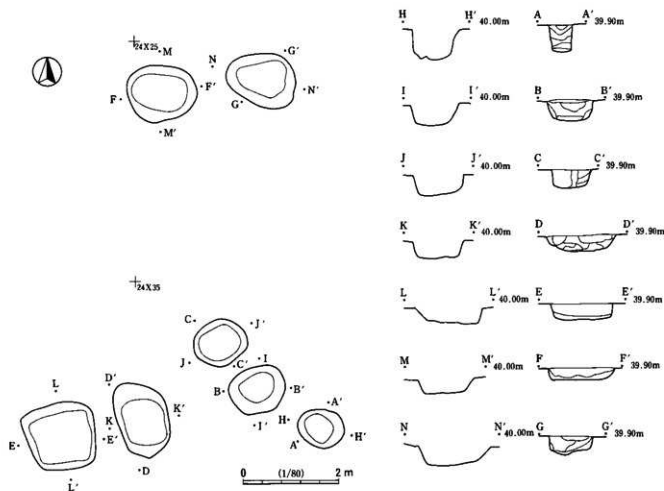
SK119群 (第48図)

調査区中央北側、24X24・25区から24X34・35区にかけて7基の土坑が密集して位置している。これらは調査時に119～122号跡の番号が付されていた。それぞれの土坑は近接して存在し土坑群をなしているため、若い番号を代表番号に付し、まとめてSK119群として捉えた。北側に隣接して2基、南側に離れて2基と3基がそれぞれ隣接して位置している。規模は長軸1.0m～1.5m、短軸0.8m～1.4m、深さ0.2m～0.6mを測る。平面形は南東端の1基を除いて楕円形を呈し、ほとんどの土坑は浅く、底面は平坦である。時期を確定するような遺物は出土しなかった。

(5) 土坑列

SA071 (第52図、図版16)

調査区中央、25X区北西側から25Y区北西隅にかけて位置し、SD070とSD072に挟まれて、長さ約50mの西南西から東北東に延びる土坑列である。17基の土坑が列をなしている。それぞれの土坑は列方向に長い隅丸長方形から楕円形を呈するものが一般的である。深さは20cm～40cmを測る。東北東隅でこの土坑列は、直角に曲がり溝SD021に連続する。時期を確定するような遺物は出土しなかった。



第48図 SK119群

SA075 (第52図、図版16)

調査区中央、25X区西側から25X区中央にかけて位置し、SD072の南側に並んで、長さ約25mの西南西から東北東に延びる土坑列である。6基の土坑が列をなしている。西側の土坑1基が離れて位置するが直線上に並ぶので、この1基も土坑列に含めて一括した。東側の5基の土坑は、3.0m～5.0mの間隔をとって並んでいる。それぞれの土坑は楕円形を呈している。深さは20cm～40cmを測る。時期を確定するような遺物は出土しなかった。

(6) 溝

SD002 (第49図)

調査区東側、24Y北西隅から24X区北西隅にかけて位置する。SD019の西側に並んで、長さ32m、幅1.0m～2.0mのほぼ北北西から南南東方向に延びる溝である。中央で連続しない部分があるが、SD020と同方向に重複し切られている。横断面形は緩やかな皿状を呈し、現存の深さは約20cm～60cmである。南隅でこの溝に直交する土坑列SA070があり、この溝を切っている。寛永通宝が少量出土している。

SD016 (第50図、図版16)

調査区西端、24W区から25W区にかけて位置する。西側の小支谷を囲むように西にカーブをとりながら、北西方向から南東方向に延びる溝である。長さ40m、幅0.8mの規模で、横断面形は緩やかな碗状を呈し、現存の深さは約10cm～20cmである。北東側にSD017が同方向に並んで位置する。南端で直角に東方向に曲がり、SD072に連続するように配置している。時期を確定するような遺物は検出されていない。

SD017 (第50図、図版16)

調査区西端、24W区から25W区にかけて位置する。西側の小支谷を囲むように西にカーブをとりながら、北西方向から南東方向に延びる溝である。長さ62m、幅0.8m～2.2mの規模で、横断面形は緩やかなV字状から皿状を呈している。現存の深さは約20cm～40cmである。南西側にSD016が同方向に並んで位置する。遺物は陶磁器が少量出土している。

SD018 (第50図)

調査区北西端、23W区から24W区にかけて位置する。北東方向から南西方向に延びる溝である。調査部分の長さ30m、幅1.0m～2.0mの規模で、横断面形は緩やかな皿状を呈している。現存の深さは約20cmである。時期を確定するような遺物は出土していない。

SD019 (第49図)

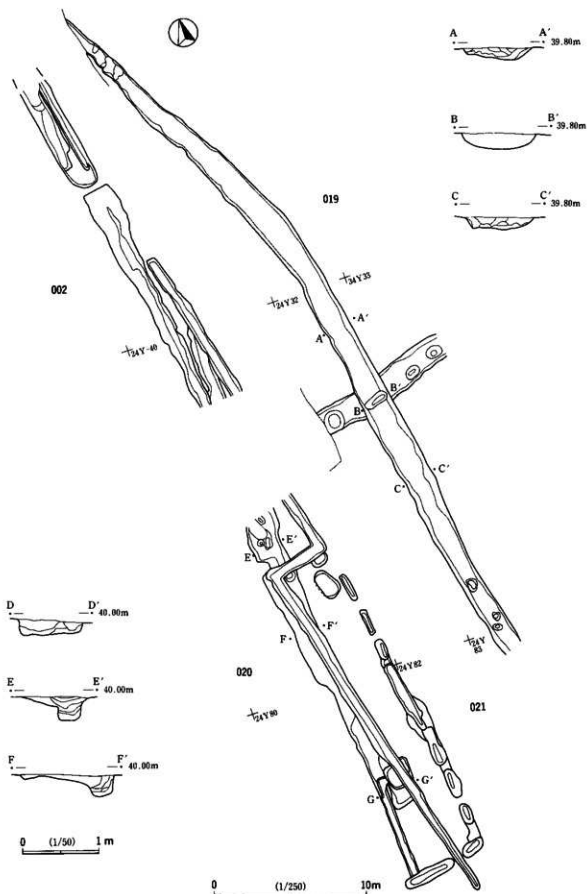
調査区東側、23Y区から24X区にかけて位置する。SD002の東側に並んで、調査した部分で長さ50m、幅2.0mのほぼ北北西から南南東方向に延びる溝である。中央で直交する溝(一部のみ調査)を切っている。横断面形はU字状を呈し、現存の深さは約40cmである。時期を確定するような遺物は出土しなかった。

SD020 (第49図、図版16)

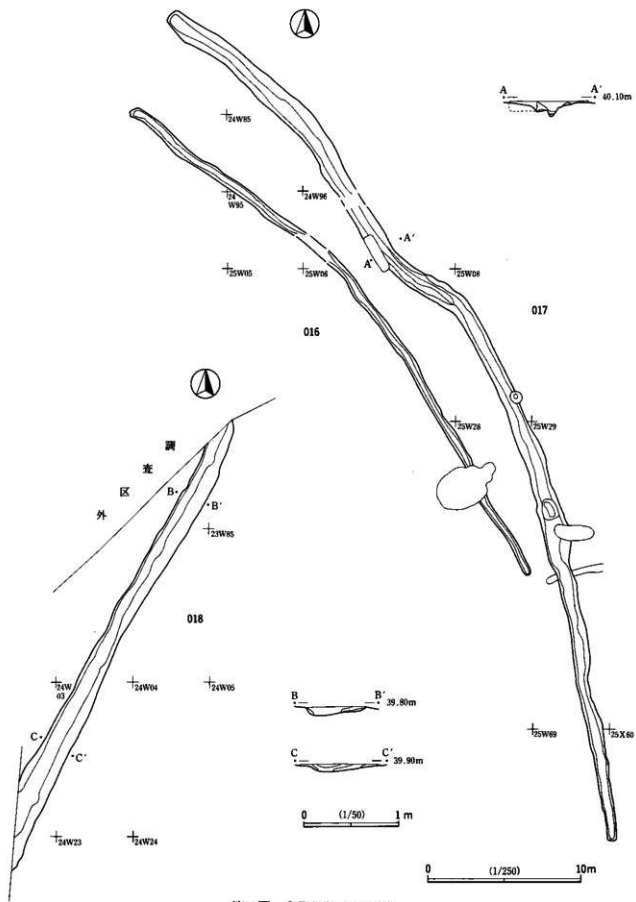
調査区東側、24Y区から24X区にかけて位置する。SD002を切って、南側で重複しながら同方向に延びる。長さ40m、幅0.8mのほぼ北北西から南南東方向に延びる溝である。中央で鉤手状に屈曲している。SD021を切っている。現存の深さは約20cmである。時期を確定するような遺物は出土しなかった。

SD021 (第49図、図版16)

調査区東側、24X区に位置する。南端でSD002を切って、SD020に切られている。長さ15m、幅0.8mのほぼ北北西から南南東方向に延びる土坑が連続した溝である。北端では土坑列状に溝が切れる。南端で



第49圖 S D002 · 019 · 020 · 021



第50圖 S D016・017・018

東方向に直角に曲がり S A 071 に連続する。現存の深さは約20cmである。時期を確定するような遺物は出土しなかった。

SD 0 2 8 (第51図)

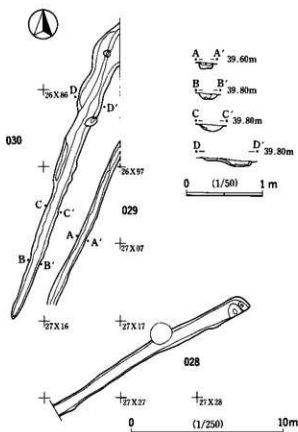
調査区南端、27 X 区に位置する。北側に SD 029、SD 030 が近接している。調査範囲で長さ14m、幅0.8mの北東から南西方向に延びる溝である。現存の深さは約20cmである。時期を確定するような遺物は出土しなかった。

SD 0 2 9 (第51図)

調査区南端、26 X 区から27 X 区にかけて位置する。西側に SD 030 が同方向に並んで位置している。調査範囲で長さ13m、幅0.7mの北北東から南南西方向に延びる溝である。現存の深さは約20cmである。遺物は出土しなかった。

SD 0 3 0 (第51図)

調査区南端、26 X 区から27 X 区にかけて位置する。東側に SD 029 が同方向に並んで位置している。調査範囲で長さ20m、幅2.0m～0.6mの北北東から南南西方向に延びる溝である。現存の深さは約20cmである。遺物は出土しなかった。



第51図 SD 028・029・030

SA033 (第52図)

調査区南側、25X区に位置する。長さ41mの西南西方向から東北東方向に延びる溝である。深さは50cmを測る。SD070・072溝とは65mほど離れて位置するが、溝の延びる方向はほぼ一致する。時期の確定できるような遺物は出土しなかった。

SD070 (第52図、図版16)

調査区の中央、25X区に位置する。南側にSA071とSD072とが同方向に並んで延びている。長さ約28mの西南西方向から東北東方向に延びる溝である。深さは15cmを測る。遺物は出土しなかった。

SA072 (第52図、図版16)

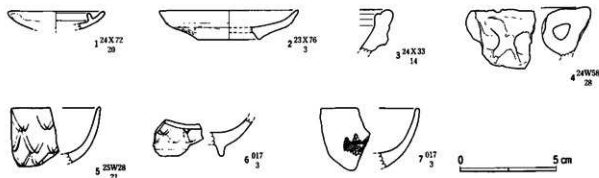
調査区中央、25W区から25X区にかけて位置する。SD070とSA071が北側に並んで延びている。長さ52mの西南西方向から東北東方向に延びる溝である。深さは20cmを測る。西端でSD017に切られ、直角に屈曲して、SD016に連続するように位置している。遺物は出土しなかった。

3 その他の遺物

本遺跡では明確に中世に時期認定される遺物は出土しなかった。ここでは近世以降の遺物を、遺構出土の遺物を含めて記載していくこととする。近世以降の遺物は少量出土している。それらの土器・陶磁器・瓦の産地別器種点数を第8表に載せた。遺物は小片が大部分であり、実測できるものは少ない。

(1) 土器・陶磁器 (第53図)

1は瀬戸美濃産の灯明受皿で、直径7.6cm、内面と外面上半に柿釉を施し、底面はぬぐい取っている。18世紀代のものである。2は同じく瀬戸美濃産の灰釉が暗緑色に発色した皿で、底部は回転ヘラケズリによる削り出し高台である。17世紀末頃と考えられる。3は無釉の焼き締め陶器摺鉢の口縁部片である。時期的には堺産のものと考えられるが、胎土はやや小豆色がかかった暗褐色で、かなり緻密なので、備前産の可能性もある。18世紀後半頃のものである。4は茶焼きの焙烙の破片である。耳の接合部はかなり幅広くなる。近世のものである。5～7は肥前産陶磁器碗の破片で、5・6は外面に二重網目文を描く、18世紀代のものである。7は外面に植物文様のコンニャク版を施す。同じく18世紀代のものである。



第53図 近世土器・陶磁器

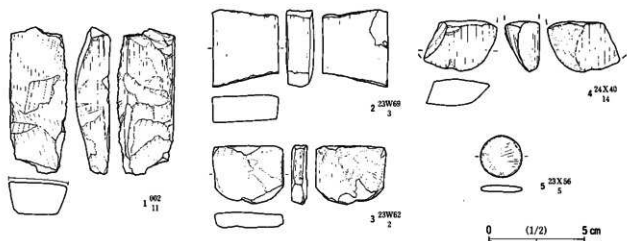
(2) 石器・石製品 (第54図)

砥石 7点が出土している。4点を図示した。4点とも欠損品であるが、延べ板状を呈するものと想定される。1はS D002出土のもので、表面で上下端部の研ぎ面がすり減り薄くなっている。2・3は長方形を呈し、表裏面に平板な研ぎ面が観察される。4は欠損し形状が明確ではないが、上下面からの研ぎにより下端部が尖る。

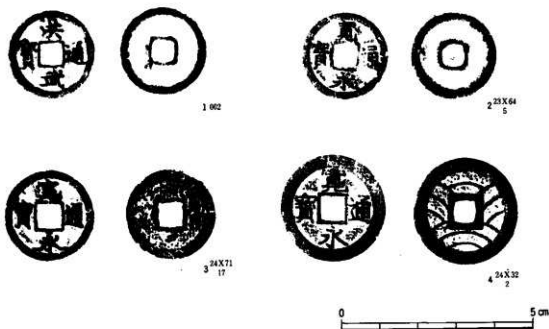
碁石 5は碁石である。S B073近くで出土した。粘板岩製で、手作業により整形されており、表裏面には多方向からの擦痕が観察される。

(3) 銭貨 (第55図)

1は明銭の洪武通寶である。S D002から出土している。2～4は寛永通寶である。4は新寛永である。



第54図 砥石・碁石



第55図 銭貨

VI まとめ

旧石器時代 2つの文化層が把握された。それぞれ、単独のブロックで構成されるため様相については明確ではない。第Ⅰ文化層の第1ブロックは小規模のブロックで、石器としてはR剥片があるのみで、特徴的な器種は存在しない。技術的にも横長剥片を剥離していることが観察されるのみである。出土層位から立川ロームIX層（第2黒色帯下部）の時期を考慮しておく。

第Ⅱ文化層はⅣ・Ⅴ層上面～Ⅲ層下部に出土層位をもつ。第2ブロックは小規模ながらナイフ形石器が検出されている。ナイフ形石器は横長剥片を素材とし、素材を斜位に用いているという共通した製作技術が観察される。形状は、刃部を欠損するが切出タイプのナイフ形石器が存在している。こうした製作技術要素をもつナイフ形石器は武蔵野台地のⅤ層～Ⅳ層下部に多く見られ、第Ⅱ文化層の時期は、このことから概ねⅤ層～Ⅳ層下部の時期に該当すると考えられる。第2ブロックの石材構成は緻密黒色安山岩が圧倒的に主体を占める。また、器種構成もナイフ形石器と剥片のみで構成され、比較的単純な構成をとる。こうした様相は、該期の一般的様相とやや異なるものであるが、本遺跡で単独のブロックで、なおかつ小規模ブロックであることに起因するものであろう。小集団が短期的、単発的に占地した遺跡であると想像される。

縄文時代 すでに本文中でもふれたが、発掘調査によって出土した土器の分布状況は台地のほぼ中央に集中しており、台地縁辺にはほとんど認められなかった。集中的に土器が出土しており、当該時期の集団の特性を示していると言える。本遺跡から出土した縄文土器はすべて早期の燃糸文土器に限られている。総点数は3,694点である。他の時期の縄文土器が1点も出土していない点に本遺跡の特徴がある。型的には井草式から稲荷台式にかけての土器が主体となるが、最も点数が多いのは夏島式である。全体の土器量の49%を占めている。次いで稲荷台式が15%、井草式が3%となる。また、無文土器が7%出土している。無文土器の特徴として小破片のものが多く、ほとんどが小型品である点があげられる。無文土器は口唇部の状態から夏島式の特徴を持つ無文土器もあるが、口縁部が若干外反するものや逆に内湾ぎみのものもあり、稲荷台式以降の様相を呈するものも出土している。内外面の調整はあまり丁寧に行われていないものが多い。口唇部に指頭痕を伴うものも目立つ。620の無文土器は内湾する器形で外面は横位の丁寧な調整が行われており、特異である。

燃糸文及び縄文の施文割合であるが、夏島式としたものは総数1,805点ある中で、燃糸文は26% (464点) 縄文は74% (1,341点) である。また、稲荷台式としたものは総数573点ある中で、燃糸文は60% (344点) 縄文は40% (229点) である。夏島式の燃糸、縄文の比率は千葉県の一般的な様相を示していると思われる。

特徴のある土器では第4類a種の絡糸条痕の土器が挙げられる。量はいたって少ない。一度口唇部に施文した後、すぐ下から垂下する条痕を施している。施文方法からすれば井草Ⅱ式的である。第4類b種の沈線文を施す土器は、個体数で1ないし2個体と微量である。出土している破片は小型の土器と考えられる。先の尖った工具で斜行する沈線文を間隔をおいて施文している。第4類c種はごく細いRの縄文原体で絞杉状の縄文が施文されているもので、1個体のみと思われる。花輪台式並行ではないかと思われる。

古墳時代 古墳時代後期住居跡が1軒検出されているのみである。この住居跡の年代は、出土土器の時期からみて、7世紀後半頃の年代が考えられる。

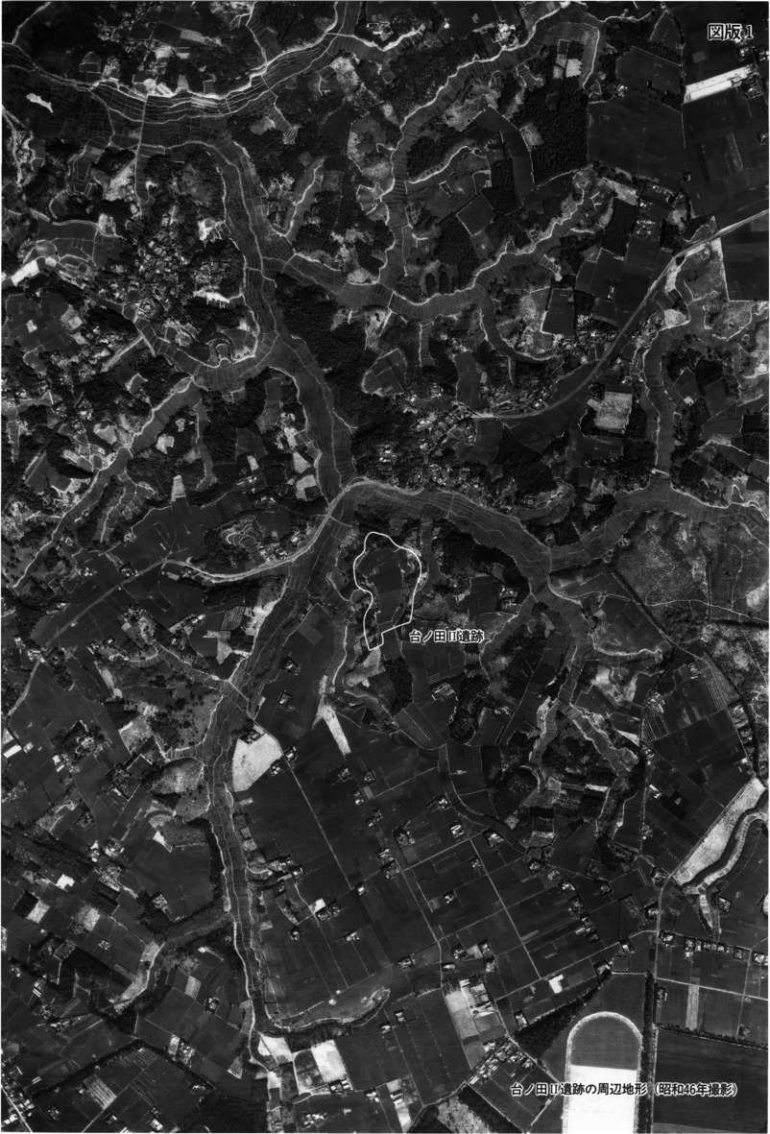
中世 馬骨が出土する土坑墓2基が、中世の所産と考える。近年、こうした調査例が増えてきている。岩山中袋遺跡（空港№2遺跡）では中世井戸、土坑から検出されている。また、隣接する駒井野西ノ下遺跡でも、馬埋葬土坑が数基検出されている。それぞれの遺構は、浅い掘込みをもつ楕円形状の形態が多く、類似した形態を呈している。また遺構の占地する場所も台地縁辺から斜面部で検出されている。SK013では炭化物層の上面に置いた状態で馬歯、馬骨が検出されており、馬の葬送形態を考える上で注目される資料である。

近世 台ノ田II遺跡では、近世の土器・陶磁器類が破片ではあるが若干量出土している。産地別に見ると瀬戸美濃産陶磁器と肥前産陶磁器の量が他に比べ多い。また、年代別に見ると、17世紀後半から19世紀まで見られるが、18世紀代の遺物量が圧倒的に多い。遺物は遺構確認中に出土したものが大半であり、遺構の時期を決定する遺物はほとんどないといつてよい。ただし、一定量の遺物の出土が見られることは、遺跡内の清跡周辺に沿うように屋敷があったものと考えられるが、18世紀代には住居が堀立柱から礎石を伴うものに既に移行したと考えられるので、現在では住居そのものの遺構を確認できないのであろう。

表8 近世土器・陶磁器類種類産地表

	器 種	瀬戸美濃	肥前	堺	志戸呂	常滑	益子	万古	不明	在地
陶 器	湯皿	1								
	片口	1								
	灯明皿	2			1					
	香炉	3								
	徳利	4								
	茶碗	1								
	摺鉢	2		3			2			
	皿	2								
	刷縁輪皿	6								
	鉢		1							
	甕						5			
土瓶							1		1	
急須								1		
磁 器	碗	2	12							
	徳利	1								
	皿		1							
	八角鉢		1							
土 師 質	皿									1
	火鉢									2
瓦 質	焙烙									2
瓦									10	
合 計		25	15	3	1	5	3	1	11	5

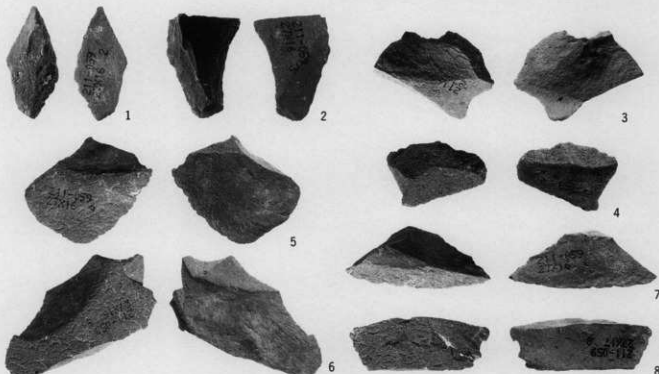
写 真 图 版



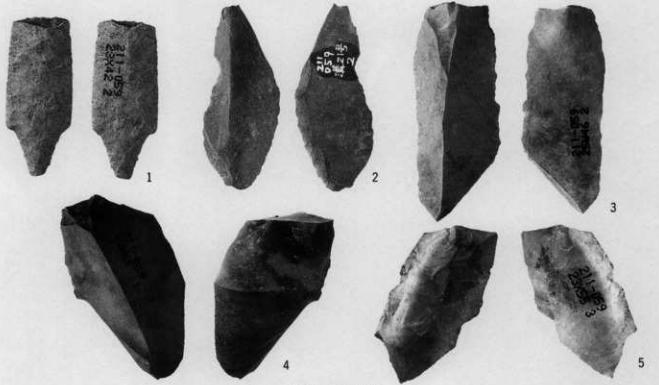
台ノ田跡



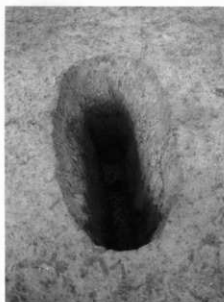
第1ブロック出土石器



第2ブロック出土石器



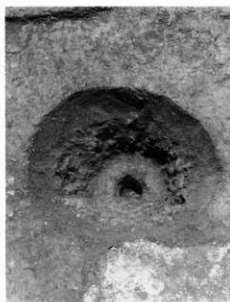
単独・表採石器



SK001 (南から)



SK006 (南から)



SK007 (東から)



SK009 (南東から)



SK014 (南から)



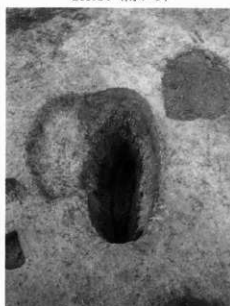
SK024 (南から)



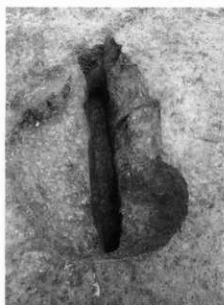
SK026 (西から)



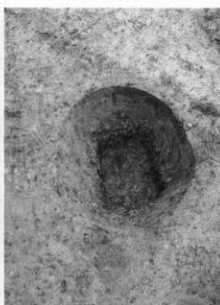
SK027 (東から)



SK031 (北東から)



SK035 (北西から)



SK036 (南東から)



SK038 (東から)



SK039 (南東から)



SK044 (東から)



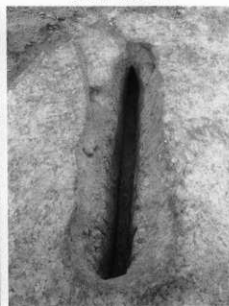
SK045 (東から)



SK041 (北から)



SK046 (東から)



SK050 (北東から)



SK051 (北西から)



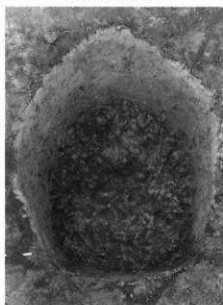
SK052 (南から)



SK053 (南西から)



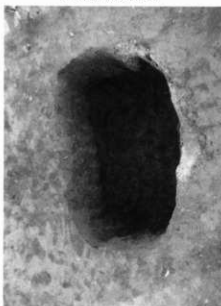
SK058 (北から)



SK067 (南より)



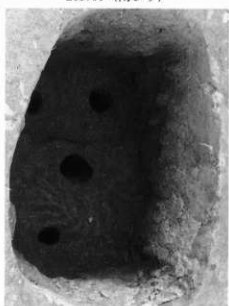
SK068 (南より)



SK084 (西から)



SK085 (南から)



SK087 (南から)



SK088 (西から)



SK089 (南から)



SK090 (北から)



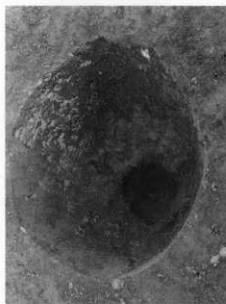
SK091 (北東から)



SK092 (南東から)



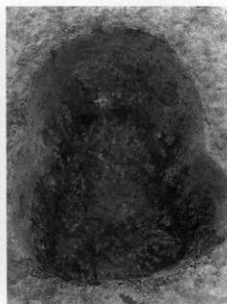
SK093 (南西から)



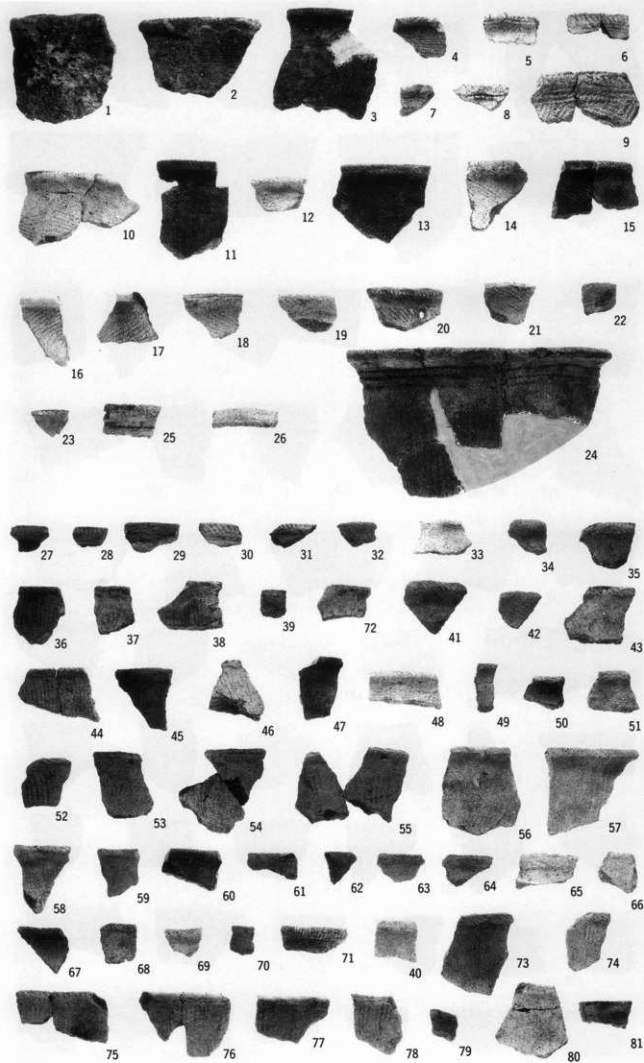
SK095 (南西から)



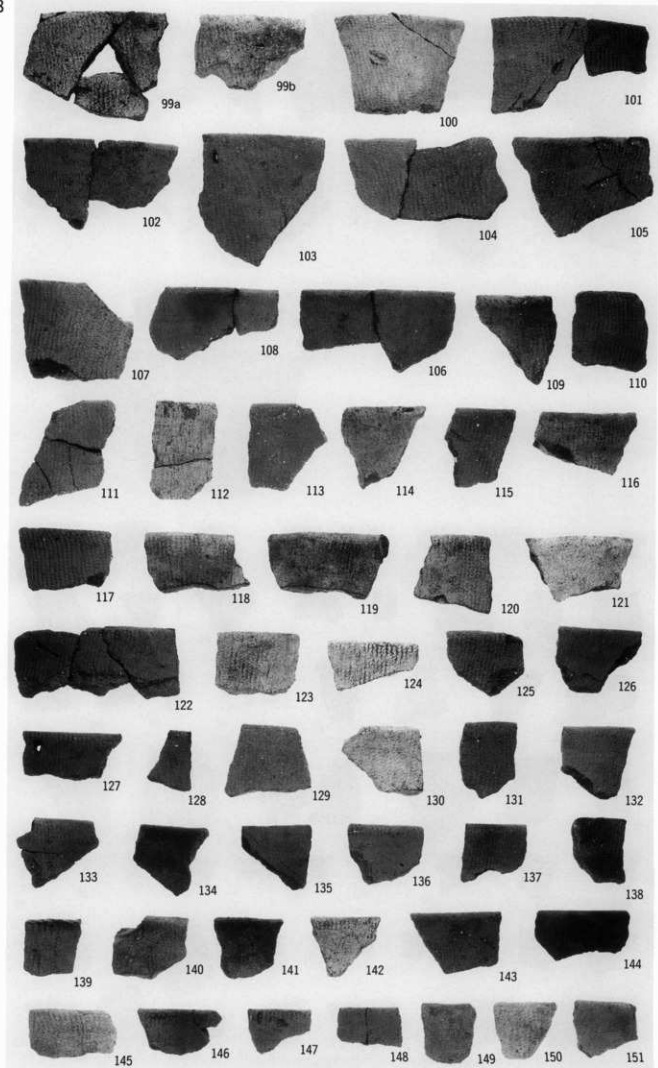
SK047 (南から)

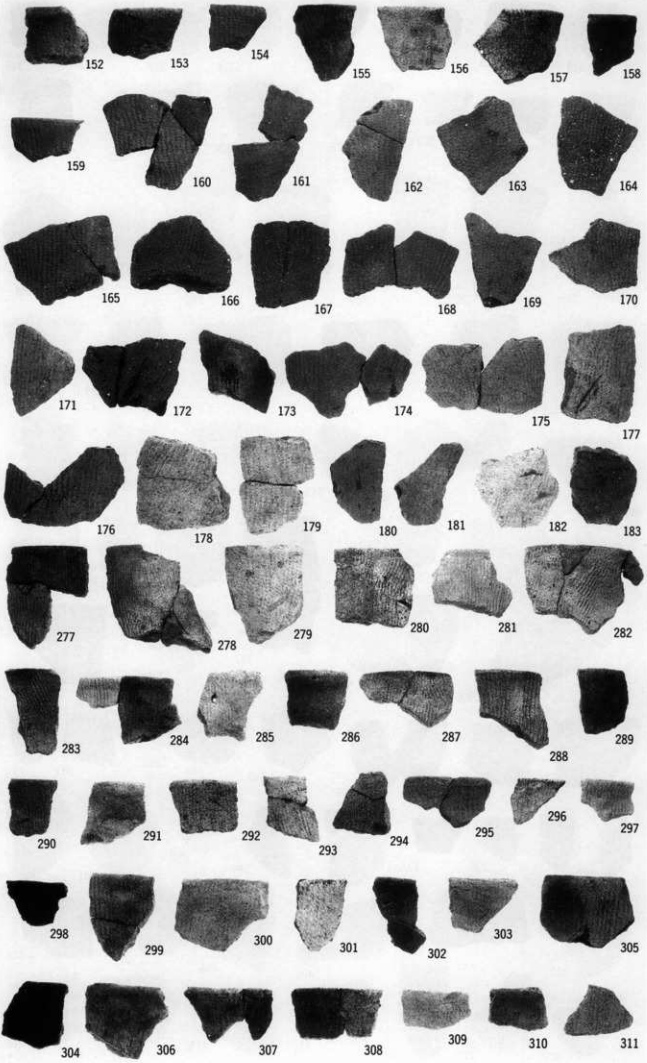


SK057 (南から)

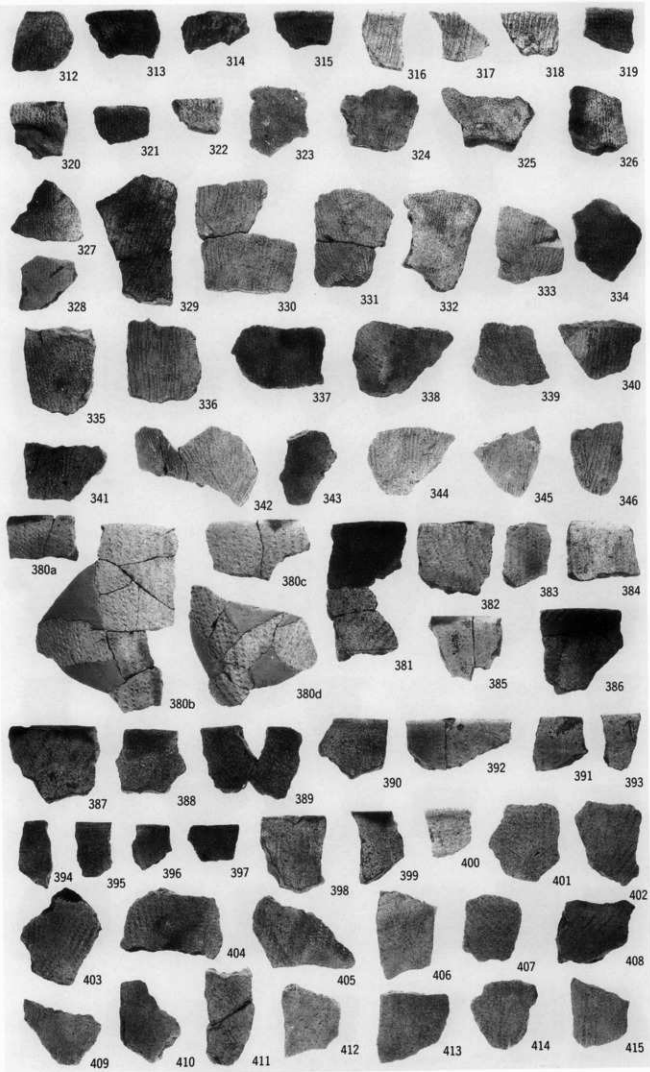


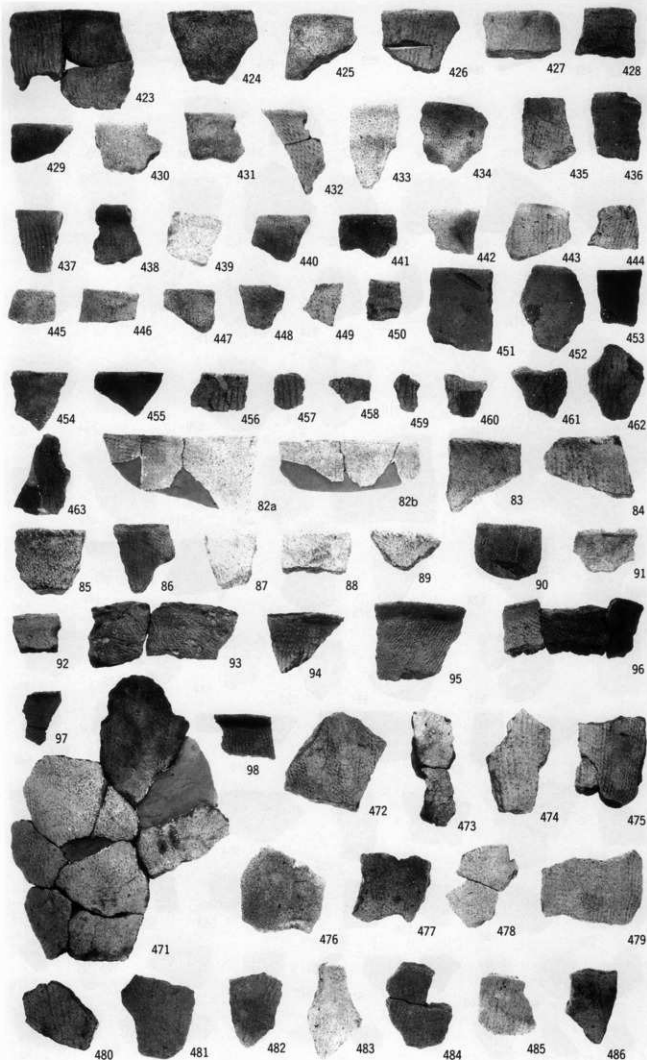
縄文土器 1

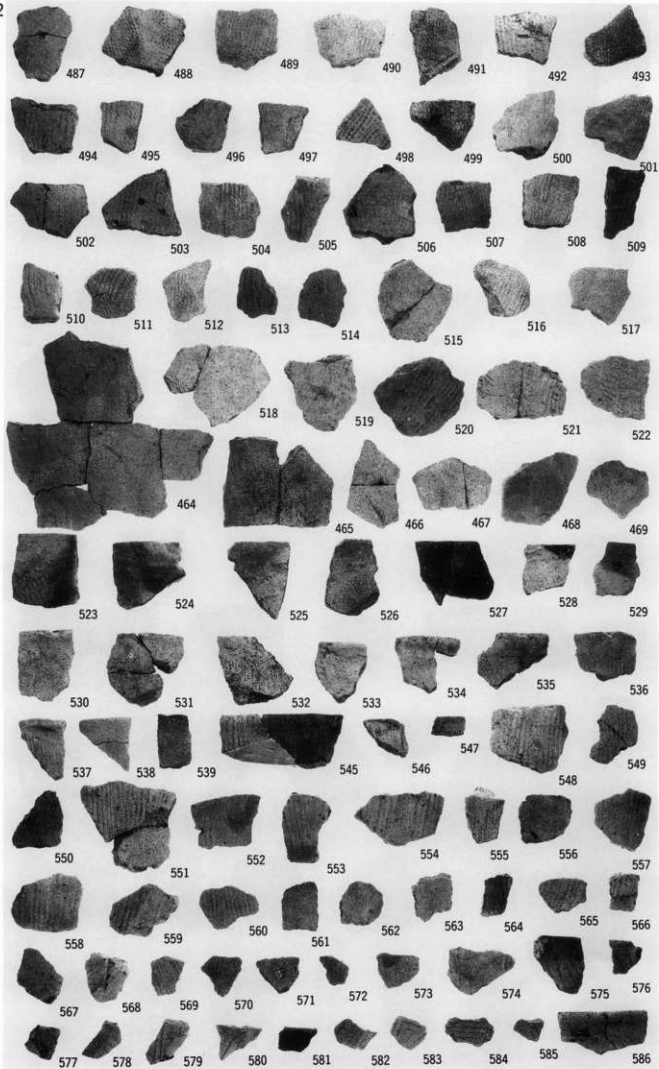


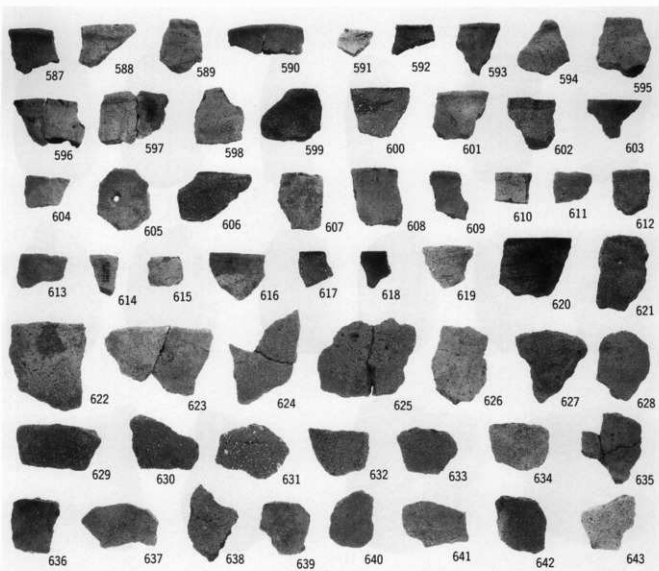


繩文土器 3

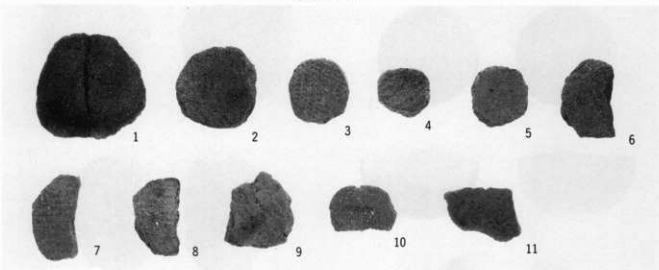








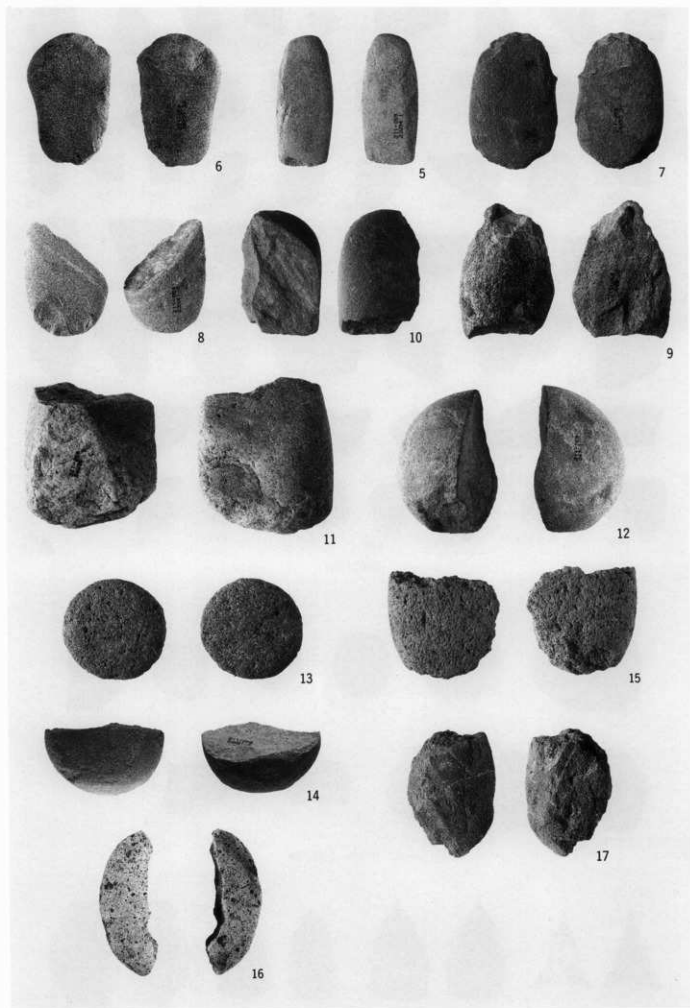
縄文土器7



土器片円盤・土器片鍾



縄文時代石器1





SI061 (南から)



SK012 (南から)



SK013 (西から)



SB073 (南から)



SK008 (北から)



SK010 (東から)



SK034 (東から)



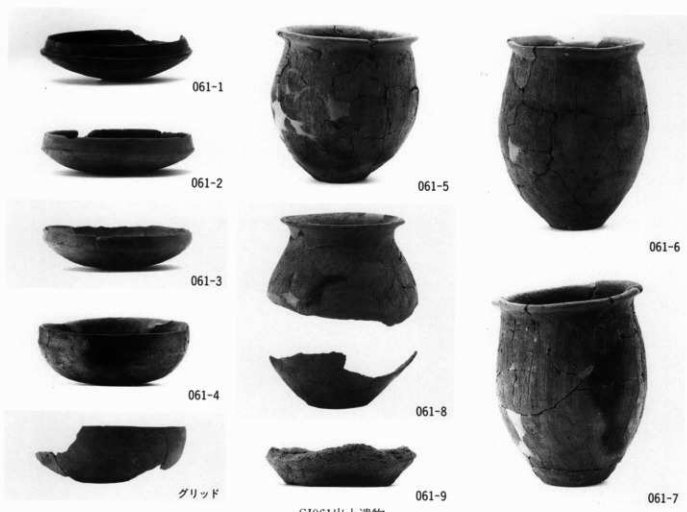
SD020・021 (北から)



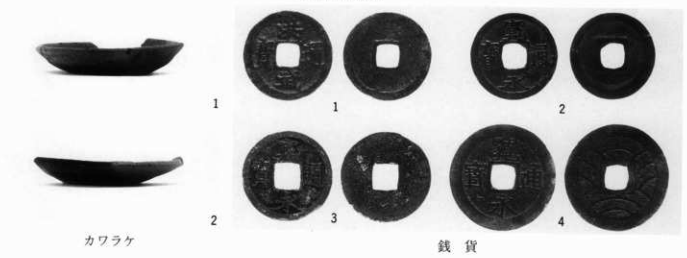
SD070・072、SA071・075 (東から)



SD・016・017 (北西から)



SI061出土遺物



報 告 書 抄 録

ふりがな	なりたこくさいぶつりゅうふくごうちまいぞうふんかざいちょうさほうこくしょ1								
書名	成田国際物流複合基地埋蔵文化財調査報告書1								
副書名	成田市台ノ田II遺跡								
巻次									
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告								
シリーズ番号	第302集								
編著者名	蜂屋孝之 矢本節朗								
編集機関	財団法人千葉県文化財センター								
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2					TEL 043-422-8811			
発行年月日	西暦1997年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
かいのぎ 台ノ田II	なるとしよまいにののの 田1,980ほか	12221	059	35度 46分 25秒	140度 22分 48秒	19950403 } 19951231	9,212	成田国際物流複合基地造成に伴う埋蔵文化財調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
台ノ田II	集落	旧石器時代	石器集中地点 2地点	ナイフ形石器		燃糸文土器が多量に出土。			
		縄文時代早期	陥穴 土坑	44基 2基	燃糸文土器、土器片円盤・土器片鏟				
		古墳時代	住居跡	1軒	土師器杯、土師器甕				
		中世	土坑墓	2基	馬骨、馬歯 洪武通寶				
		近世	掘立柱建物跡 溝 土坑 土坑群 土坑列	1棟 13条 9基 1群 2条	カワラケ、陶磁器				

千葉県文化財センター調査報告第302集

成田国際物流複合基地埋蔵文化財調査報告書 1

成田市台ノ田II遺跡

平成9年3月31日発行

編	集	財団法人	千葉県文化財センター
発	行	千葉県	企業庁
			千葉県中央区長洲1-9-1
		財団法人	千葉県文化財センター
			四街道市鹿渡809-2
印	刷	株式会社	弘文社
			市川市市川南2丁目7番2号
